２．奈良女子大学編

２．１　教育（地方創生を担う人材育成）について

総　論

奈良女子大学における地域志向科目は、平成 28 年度は 29 科目を開講し 925 名が履修、平成 29 年度は 29 科目を開講し 961 名が履修、平成 30 年度は 32 科目を開講し 1,810 名が履修した（重複履修者を含む）。

平成 30 年度から開講した教養教育科目「『奈良』女子大学入門」は、奈良県から産業・雇用振興部及び、まちづくり推進局地域デザイン推進課の職員による県の産業政策・雇用強化に関する講義や、(一財)南都経済研究所の研究員による「奈良県の経済動向」に関する講義、奈良経済同友会会員企業経営者による「奈良を知る・奈良で就職」をテーマとした講義を展開し、地元定着を志向した教育内容で、１回生を中心に 662 名が履修した。

さらに、平成 29 年度から開講している教養教育科目「なら学+（プラス）」は、事業協働機関（ＣＯＣ＋参加校、県・市町村ならびに県内民間企業）から、実務に携わる専門家、実務家を迎え、多彩なゲスト講師によるリレー講義で構成した。奈良の伝統産業、奈良の基幹産業（林業・農業・観光・繊維・製薬）などの魅力や課題に身近に触れながら、課題発見、問題解決、提案力を養い、「生きた知」を身に付けた未来の地域リーダーを育成する科目として展開してきたが、平成 30 年度は１コマの授業の中で行政、民間双方からゲスト講師を招き、地域への理解を深め、地域の課題等について多面的・多角面でのモノの見方をできるように授業内容を見直した。

全学部生に対する地域志向科目の履修者（入学後に１科目でも履修したことのある実人数）は、平成 28 年度 2,069 名に対して 614 名（履修率 29.6%）、平成 29 年度 2,063 名に対して 994 名（履修率 48.2%）、平成 30 年度 2,085 名に対して 1,541 名（履修率 73.9%）と順調に増加している。

教養教育科目「『奈良』女子大学入門」、「なら学+（プラス）」などの地域創生理解科目を下支えとして、その上にＰＢＬ型教育科目による実践を通じて専門性を身に付ける教育プログラムを構築し、平成 31 年度入学者より地域志向科目の全学必修化の学内手続きを完了した。

起業マインド醸成のため、平成 28 年度に「女性の起業(働き方)を考える」セミナーを実施した他、平成 29 年度、30 年度においては、「なら学+（プラス）」授業の中で奈良県出身の女性起業家をゲスト講師として招き、当該講師が起業に至った過程や起業の魅力、課題解決などについて紹介した。また、奈良県主催の「キャリア形成講座」（ライフデザインやファイナンシャルプランニングを学ぶ講座）に共催し、同セミナーを学内にて開催、本学学生が参加した。現在、起業マインド教育を深化させるため、平成 31 年度から全学共通キャリア教育科目において、アントレプレナー講座を開講するための準備を進めている。

（１）地域志向科目の履修状況

１）地域志向科目の開講科目数ならびに履修者数の推移

		平成28年度	平成29年度	平成30年度
開講科目数		29科目	29科目	32科目
内訳	地域創生科目	15科目	13科目	11科目
	PBL科目	14科目	16科目	21科目
履修者数		925名	961名	1,810名
新規開講科目例		キャリアデザイン・ゼミナール（日本一の奈良を知る）	「なら学＋(プラス)」	「奈良」女子大学入門 サイエンス・オープンラボ 地域連携運動演習

地域志向科目の開講科目数と履修者の推移

平成 30 年度の地域志向科目数は前年度より３科目増加の 32 科目となった。地域志向科目について全学教育ガイド（学部学生全員配布）に独立した項目を設け、履修指導を行った他、同科目の必修化を踏まえた「『奈良』女子大学入門」などを新たに開講したことから履修者数は前年度より大きく増え、延べ 1,810 名が履修した。

２）地域志向科目の履修者数ならびに履修率の推移

履修者数と履修率（重複履修者を除く）		平成28年度	平成29年度	平成30年度
H28年生	入学者数 506名	236人(47%)	297人(59%)	391名(77%)
H29年生	入学者数 515名		277人(54%)	445名(86%)
H30年生	入学者数 520名			435名(84%)

地域志向科目の履修者数と履修率の推移

地域志向科目の履修者数ならびに履修率は平成 28 年度生（現 3 回生）391 名（77%）、平成 29 年度生（現 2 回生）445 名（86%）、平成 30 年度生（現 1 回生）435 名（84%）と増加した。

特に、「『奈良』女子大学入門」の新規開講ならびに、昨年度から開講している「なら学＋(プラス)」の履修者数の増加が要因として挙げられる。

（2）平成 30 年度の地域志向科目ならびに履修者数

平成 30 年度の地域志向科目は以下の 32 科目を開講し、1,810 名が履修した。

区分	通番	センター区分		コード	授業科目名	担当教員	履修者数
教養教育科目	1	地創	前	0102300	奈良女子大学入門	小川・成瀬	662
	2	PBL他	前	0136111	パサージュ2OA	高田・吉田	11
	3	PBL他	前	0136115	パサージュ32A	宮路	16
	4	PBL他	前	0136116	パサージュ32B	宮路	15
	5	地創	前	0139500	なら学	寺岡　他	201
	6	地創	後	0139550	なら学+(ﾌﾟﾗｽ)	成瀬・前川	208
	7	地創	後	0139930	環太平洋くろしお文化論	小路田・西谷内 他	84
キャリア教育科目	8	PBL協	後	0152511	ｷｬﾘｱ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ･ｾﾞﾐﾅｰﾙB(11)	高村	41
	9	PBL協	前	0152517	ｷｬﾘｱ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ･ｾﾞﾐﾅｰﾙB(17)	高村	33
	10	PBL他	前	0152541	ｷｬﾘｱ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ･ｾﾞﾐﾅｰﾙB(41)	三木	5
	11	PBL他	前	0152546	ｷｬﾘｱ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ･ｾﾞﾐﾅｰﾙB(46)	横山　他	8
	12	PBLサ	前	0152552	ｷｬﾘｱ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ･ｾﾞﾐﾅｰﾙB(52)	室崎　他	12
	13	PBLサ	後	0152553	ｷｬﾘｱ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ･ｾﾞﾐﾅｰﾙB(53)	中山・室崎　他	12
文・専門教育科目	14	地創	後	2001070	なら学概論B	寺岡	55
	15	地創	後	2010180	歴史地理学概論	出田・山近	32
	16	地創	前	2010760	地誌A	浅田	15
	17	地創	後	2032120	文化人類学特殊研究	武藤	100
	18	PBL協	前	2033320	なら学フィールドワーク実習	寺岡	8
	19	PBLサ	後	2033570	歴史学実習	西谷地　他	7
	20	PBLサ	前	2033780	コミュニティ・リサーチ	水垣・寺岡・佐藤	34
	21	PBLサ	後	2033790	コミュニティ・アクション	水垣・寺岡・佐藤	8
	22	PBL協	前	2033900	文化メディア学実習B	内田	13
	23	地創	後	2034020	なら学演習	武藤・寺岡	26
	24	地創	後	2034780	地域社会の課題演習	高田・浅田・西村	14
	25	地創	前	2034990	現代民族論演習	内田	13
理・専門教育科目	26	PBL協	前	3003810	サイエンス・オープンラボⅠ(A～E)	小林　他	39
	27	PBL協	前	3003910	サイエンス・オープンラボⅡ(A～E)	小林　他	16
	28	PBL他	前	4504200	森林生物学野外実習	酒井・井田　他	16
	29	PBL他	前	4504300	河川生物学野外実習	片野　他	18
生環・専門教育科目	30	PBLサ	後	5522000	地域居住学	中山	36
	31	PBLサ	前	5525000	福祉住環境学	室崎	39
	32	PBL他	後	5768000	地域連携運動演習	成瀬	13
合計							1,810

平成 30 年度の地域志向科目ならびに履修者数

（３）「『奈良』女子大学入門」の開講　　履修者　662 名

教養教育科目「『奈良』女子大学入門」は、奈良女子大学で学び、安全で充実したキャンパスライフを送るために必要不可欠な内容をオムニバス形式で講義する授業で、Ⅰ.キャンパスライフの充実、Ⅱ.奈良で暮らす、Ⅲ.奈良女子大学で学ぶ、Ⅳ.奈良を知る・奈良で就職の４つテーマで構成されている。

学長、学部長からのメッセージのほか、本学の歴史や男女共同参画社会推進のための取組、奈良県の経済や県内企業との共同研究を紹介し、キャリアデザインを奈良からスタートする授業となっている。

教育テーマⅣ 「奈良を知る・奈良で就職」	ＣＯＣ＋事業について	やまと共創郷育センター
	奈良県の経済	(一財)南都経済研究所
	奈良県の動向	奈良県雇用政策課・県土マネジメント部
	奈良県企業との共同研究	理事（研究・情報担当）
	奈良で就職①	学生生活課就職係
	奈良で就職②	奈良経済同友会会員企業２社

p

教室の様子

授業の様子

（4）「なら学＋（プラス）」の開講～奈良を通じて地方創生の知見を深めよう！～

履修者　208 名

教養教育科目「なら学＋（プラス）」は、事業協働機関（ＣＯＣ＋参加校・協力校、県・市町村ならびに県内民間企業）からの専門家、実務家を迎えるなど多彩なゲスト講師によるリレー講義で構成されている。奈良の伝統産業、奈良の基幹産業（林業・農業・観光・繊維・製薬）などの魅力や課題に身近に触れながら、課題発見、問題解決、提案力を養い、「生きた知」を身に付けた未来の地域リーダーを育成する科目として昨年度より展開しているが、１コマの授業の中で行政、民間双方からゲスト講師を招き、地域への理解を深め、地域の課題等について多面的・多角面でのモノの見方をできるように授業内容を見直した。

毎回小問を課したほか、最終レポート「奈良への提案」に具体的な内容や、提案に至った理由・背景や将来展望など課題解決策を提出させ、ＰＢＬ授業の要素を盛り込んだ。

平成 30 年度の授業内容は以下のとおり。

	授業内容	担当教員（ゲスト講師）
1 回	ガイダンス	やまと共創郷育センター（成瀬・前川）
2 回	奈良でのコンテンツツーリズムを考える	奈良県立大学【COC+参加校】
3 回	観光産業への理解を深め、課題を探る	奈良市観光協会＆飛鳥観光協会
4 回	女性の起業やワーク＆ライフプランを考える	奈良県女性活躍推進課＆㈱Ｔ Able a Cloth
5 回	生活福祉（地域で暮らす）を考える	奈良佐保短期大学【COC+協力校】
6 回	地域福祉（地域で暮らす）を考える	奈良県社会福祉協議会＆（社福）功有会
7 回	モノづくりを通じての地方創生	奈良工業高等専門学校【COC+参加校】
8 回	伝統産業（林業）の理解と課題を探る	奈良県森林技術センター＆㈱イムラ
9 回	産学連携と地場産業（靴下）の理解と課題を探る	奈良女子大学＆㈱キタイ
10 回	伝統産業（製薬）の理解と課題を探る	奈良県薬事研究センター＆田村薬品工業㈱
11 回	地域社会における技術者の役割	奈良工業高等専門学校【COC+参加校】
12 回	奈良の現代産業に聞く	㈱ＡＴＯＵＮ＆ＤＭＧ森精機㈱
13 回	柿（奈良特産）を通じたマーケティングを考える	奈良県農林部＆㈱マックス
14 回	地方自治体の役割・課題を探る	奈良県地域振興部＆下市町
15 回	学生による地域活動発表と地方創生にかかる講演	本学学生２グループ＆南都経済研究所

授業の様子

（５）ＰＢＬ型授業（課題解決型授業の一部紹介）

１）なら学フィールドワーク実習（担当：寺岡 伸悟）

「なら学フィールドワーク実習」は、文学部専門教育科目に位置付けられる科目である。今年度は、人文社会学科の２・３回生が履修している。今年度の特徴は、履修学生自らが学生記者となって、希望する県内企業を複数回訪問、経営者、従業員の方へのインタビューや営業、生産などの現場を取材し、学生目線で県内企業の魅力を発見・発信する実践的な授業となっている。取材に基づく記事・誌面づくりを通じて企業研究、社会人（企業人）との応対練習の他、学生自身の就業力・社会人基礎力の向上も期待できる授業である。

今回、ご協力いただいた県内企業訪問先は、（社福）ぷろぼの、ディライト㈱、スケーター㈱、奈良テレビ放送㈱の４社である。

授業はやまと共創郷育センターの前川特任教授と共同で行った。まずガイダンス時に奈良県内企業のパンフレットを多数用意し、学生に閲覧してもらうところから授業は始まった。学生たちはすでにこの段階で、企業によってＰＲ力に差があることや、全般的にそれぞれの企業の活動内容のわかりにくさを感じたようである。こうしたことが履修への動機を形成したと思われる。訪問先の企業選定にはやまと共創郷育センターが作成した県内企業一覧が大変役立った。そのなかから社会福祉法人、サービス業、製造業、そしてメディアと、多彩な対象が選ばれたと思われる。

こうした授業では通常、一度きりの訪問で報告書を作成する事例が多いことを教員は知っていたので、少なくとも３度は訪問することで、これまでとは違う深い理解を、その企業に対して行ない、そこから、奈良女子大生が奈良の企業に就職を考えるための参考となるような魅力・情報を「掘り出してくる」という本格的な狙いがあった。

１度目はやまと共創郷育センターの前川特任教授に同伴していただいての訪問だったが、それ以降は、企業の担当者の方とのやりとりも学習のうちであり、それが対象への理解を深めることにもなると考え、履修生にがんばってもらった。授業中盤からは、そうして集まってきた情報を、学生向けのリーフレットにするとすれば…という想定でまとめていこう、という方向性に決まった。これも履修生たちの議論の中から出てきた方向性である。そこで、リーフレットの編集やそれを意識した取材の専門家をゲスト講師として授業に招聘し、学生たちに懇切丁寧に取材と編集の基本を教えていただいた。一月に一度のペースで取材に赴き、その結果を全員で共有しお互いにその企業をわかりやすく紹介するために必要な観点を話し合うという方法を３回繰り返したことになる。企業の仕組みや企業人というものについて、どんどん理解が深まっていく様子が感じられた。また、奈良で働く良さ、奈良にもこんなに頑張っている企業や人がいるのだ、ということを理解してくれているようで、手応えの感じられる授業だった。授業は前期では到底終了することができず、リーフレットの編集が今も続けられている。

履修生の中から、またこの話を聞いた学生の中から、奈良への就職を考える学生が出てくれることを期待している。

スケーター㈱を訪問

奈良テレビ放送㈱を訪問

(社福)ぷろぼのを訪問

ディライト㈱を訪問

2）「パサージュ20Ａ」　（担当：高田 将志・吉田 容子）

①授業実施日

2018年度「パサージュ20Ａ」授業（全学1回生対象）

第1回：合同オリエンテーション

第2回(4月17日)：ガイダンスおよび現地訪問のための資料収集、事前学習の方法の説明

第3回(4月24日)：下市町・吉野町現地訪問のための作業実習(1)

第4回(5月8日)：下市町・吉野町現地訪問のための作業実習(2)

第5回～第7回(5月12日～13日、1泊2日)：下市町・吉野町での野外実習(1)～(3)

第8回(5月22日)：下市町・吉野町での野外調査結果の報告会

②授業の概要

本授業における学びの特徴は、「実際に、地域に足を運んで、自分の目で確かめて実感する」ことである。今回の野外実習地として、昨年度本授業で訪れた奈良県吉野郡下市町に、同町に隣接する吉野町を加え、1泊2日で行った（1回生11名（文学部10名、理学部1名)、教員2名、ＴＡ学生1名)。

下市町や吉野町の地場産業である木材加工業の現状を見学し、奈良県南部の中山間地域が直面している過疎化や高齢化、林業が抱える諸問題について、参加学生が主体的に考えることをねらいとしたものである。野外実習前の授業では、下市町や吉野町について関心を持ったテーマを選び、各自下調べを行って発表した。野外実習後の授業では、参加学生による報告会を行った。

野外実習1日目：10時半に近鉄「下市口」駅（大淀町）に集合し、徒歩で大淀町～下市町の商店街を見学しながら、昼頃に下市町役場敷地内のアクティビティセンターに到着。昼食後、下市町の地場産業である三宝・神具の生産を長年手がける木工所を見学（別添写真)。

野外実習2日目：おもに吉野町内の見学で、午前中は、吉野ブランド木材を扱う製材所を見学し（別添写真)、昼食後は、吉野貯木場とその周辺を散策した後、吉野杉で建てられたゲストハウス「吉野杉の家」を見学した。

③学生の感想（学生レポートより抜粋）

パサージュを通じて、普段なかなか訪れる機会のない場所を訪れることができ、貴重な体験となった。実際に現地を訪れることでしか体験できないことがあるということを、あらためて実感することができただけでなく、仲間との楽しい思い出も作ることができたので、パサージュを履修して本当に良かった。

この授業を選択した動機は、大学での野外実習がどのようなものか気になったからです。最初は、下市町や三宝、吉野林業についての知識はほとんどない状態でした。ですが、下調べ学習や、先生の説明、ＴＡの大学院生の発表によって、ある程度の予備知識を得てから、課外学習に臨めたので、現地でのお話の理解も深まったように思います。

最初の事前学習の段階では、三宝などの歴史的・文化的なことに興味があったのですが、実際に下市町や吉野町に行って木材を身近に見学して、自然を感じる樹木そのものに惹か

れ、レポートのテーマにしました。自分の新たな興味を発見することができたのは、とても有意義なことだったと思います。

林業についてくわしく学ぶことができました。山林から伐採した木材がどのように河川によって運ばれ、売買されたり加工されるのかを知りました。林業の発展や衰退が社会の変化に大きく影響されてきたことがわかり、産業と歴史の関わりについてもっと深く知りたいと思いました。

④授業成果

担当者の専門分野（「地理学・地域研究」）では、とにかく現場に出て現場を見る、ということが大事である。文献講読や統計分析などのいわゆるインドア・ワークとともに、フィールド・ワークの重要性についても、１回生の段階から理解してもらえるよう、本授業の内容を設定した。過疎地域に足を運んだことのない学生が大半であったので、過疎の現状を当該地域の地場産業を通じて具体的に知り、地域が抱える問題を考えてもらいたかった。野外実習時の学生の様子や最終レポートを見る限り、現場に出る楽しさや、そこで何を見て、何を感じ、何に興味を持つのかということに各自積極的に関わってくれたと思う。

三宝・神具の製造について伺う

原木から木材加工までの工程を見学

吉野杉の原木を観察

3）「コミュニティ・リサーチ」：地域コミュニティの課題把握法

（担当：水垣源太郎・佐藤克成・寺岡伸悟）

①授業実施日

第1回　4月28日　講義とアイスブレーキング、調査方法論、学外実習準備

第2回　5月19日～20日　学外実習Ⅰ（奈良県吉野郡下市町）

第一日：農山村生活体験（摘蕾体験）、朴の葉寿司体験、写真撮影実習、農山村生活体験（家庭料理調理体験）

第二日：農山村生活体験（家庭料理調理体験・生活実習）、下市町巡検

第3回　グループ別活動（日程はグループごとに調整）

第4回　7月7日～8日　学外実習Ⅱ（奈良県吉野郡下市町）

第一日：グループ別現地調査、農山村生活体験（家庭料理調理体験）

第二日：農山村生活体験（家庭料理調理体験・生活実習）、グループ別現地調査フォトブック制作

②授業の概要

本授業（コミュニティ・リサーチ）は、後期授業（コミュニティ・アクション）とともに、地域コミュニティの現状を理解するためのコミュニティ社会学の理論と方法を実践的に学び、それを通して、課題の解決の糸口となるアクション（ＰＲコンテンツ制作や特産品開発、成果イベントなど）の企画・実践の過程を体験的に学ぶことを目的としている。

本授業ではまず、コミュニティ社会調査の方法論とその実践例（らくらく農法）を概説した後、下市町内各地の地域住民の方々の協力を得て、２回の現地調査実習と巡検、農山村生活体験（柿の摘雷体験、伝統料理の調理体験、生活実習）を行った。その成果はフォトブックにまとめて、後期授業後にご協力いただいた地域住民の方々に還元する予定である。

担当教員は水垣源太郎（文学部）、佐藤克成（生活環境学部）、寺岡伸悟（文学部）の３名であり、履修生は34名（文学部29名、生活環境学部４名、留学生１名）であった。

③学生の感想

学生からのレポートによれば、そのほとんどが本授業が「おもしろかった」、本授業を通して「新しい知識やものの見方がとても得られた」と回答し、後期授業の履修へとつながった。とくに今年度前期はグループ別に活動計画を立てて自主的な活動を行ったばかりでなく、地域住民の方々から伝統料理の調理を体験させていただいたり、地域生活に関するお話を直接伺ったりしたことが貴重な体験となり、楽しく地域を学ぶことにつながっている。

④授業成果（担当教員からのコメント）

履修生は、大都市圏出身の学生とそれ以外の地方の学生であり、もともと地域コミュニティの問題への関心が高かった。奈良県南部中山間地域の課題を現地住民の方々から直接うかがうという経験、地域の持つ文化資源を体験的に見直すという経験によって、学生は奈良を理解するのみならず、地域コミュニティの課題解決のための実践的方法論を習得することができた。とくに、その調査（集落点検）の成果がフォトブックという形に残る成果

となり、ご協力いただいた地域に還元することができたことも学生と地域の両方に役立つ授業となったと考えられる。

グループ別現地調査（農産物加工）

グループ別現地調査（地場産業）

グループ別現地調査（伝統産業）

グループ別現地調査（伝統産業）

農山村生活体験（家庭料理）

農山村生活体験（伝統料理調理体験）

データ整理

参加者集合写真

4）「コミュニティ・アクション」：地域コミュニティの課題解決に向けた活動実践

（担当：水垣源太郎・佐藤克成・寺岡伸悟）

①授業実施日

第１回　10 月 20 日　講義、グループ分け、アイスブレーキング・担当・佐藤ドローン、全方位カメラ、タッチパネルを午前中１か所、午後１か所で試す。

第２回　11 月 10 日～11 日　学外実習Ⅰ（奈良県下市町）

第一日：農山村生活体験（柿収穫体験）、記録ツール実習、グループ別現地調査

第二日：グループ別現地調査

第３回　グループ別活動（日程はグループごとに調整）

第４回　12 月１日～2 日　学外実習Ⅱ（奈良県下市町）

第一日：グループ別活動

第二日：下市町・奈良女子大学連携公開講座

「最新の動画ツールを活かす―ドローン、ＶＲ、Youtube：学生からの提案」

（於：広橋会館）での成果報告

②授業の概要

本授業（コミュニティ・アクション）は、前期授業（コミュニティ・リサーチ）に引き続き、地域コミュニティの現状を理解するためのコミュニティ社会学の理論と方法を実践的に学び、それを通して、課題の解決の糸口となるアクション（ＰＲコンテンツ制作や特産品開発、成果イベントなど）の企画・実践の過程を体験的に学ぶことを目的としている。

本授業では、佐藤講師の主指導の下に、ドローン、全方位カメラ、ＶＲなどのツールを社会的に役立てる方法を考えた。履修生は、まず事前課題として、前期コミュニティ・リサーチの経験を踏まえ、下市町の魅力を生かし、あるいは抱える課題を解決するためのツール活用法について事前レポートを作成した。その内容に基づいて３つのチームに分かれ、各課題に応じた現地調査計画を立案し、学外実習Ⅰにおいて実査を行った。その結果を踏まえて、動画やプレゼン資料を制作し、第４回学外実習Ⅱの第二日に開催した公開講座において発表した。公開講座では学生報告の後にディスカッションの時間を設け、聞きに来ていただいた地域住民の方々にフィードバックをいただいた。その結果を踏まえ、最終成果物としてプレゼンファイルと動画を提出させた。

担当教員は水垣源太郎（文学部）、佐藤克成（生活環境学部）、寺岡伸悟（文学部）の３名であり、履修生は 10 名（文学部８名、生活環境学部１名、大学院生１名）であった。

③学生の感想

学生のほとんどが本授業を通して「新しい知識やものの見方がとても得られた」と回答している。とくに後期は公開講座での発表を目標として、前期で学んだ地域の問題をふまえて、地域に役立つアクションを自主的にデザインし、住民の方々からフィードバックをいただいたことが貴重な体験となった。

④授業成果（担当教員からのコメント）

本授業では、前期授業において地域の特性を学んだ履修生が最新動画ツールに関する知識と感性を活かしたビデオや地域特産品の制作・開発に取り組んだ。昨年度に比べ、前期後期のつながりを意識した授業内容としたため、学生一人一人が地域の課題についてリサーチを行ったうえでアクションを考えるという地域連携教育の形が定まったといえる。公開講座の際には地域住民の方々から学生からの提案に対して、地域住民の方々から提案に関する問題点や課題、要望や期待などとても真摯なご意見をいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

次年度は最終年度として、この授業形態を継続的に実施するための更なる工夫を行いたい。

講義

現地実習（柿の収穫体験）

ドローン撮影実習

食事風景

公開講座①

公開講座②

公開講座③

公開講座

公開講座集合写真

履修生集合写真

5）地域社会の課題演習 2018　（担当：西村雄一郎・浅田晴久・高田将志）

①授業実施日

第１回　10 月 4 日　　初回ガイダンス

第２回　10 月 24 日　事前学習

第３回　11 月 10 日～11 日　１泊２日で十津川村を訪問

第４回　12 月 12 日　事後学習

②授業概要：

本授業では、農山村を中心とした「地域社会」が現在いかなる問題を抱えているのかを実体験を通して知ることを第一の目的とした。そして、それらの問題がどのような背景から生み出されたものか多面的に検討し、地域社会についての理解を深めるとともに、課題解決への道を探ることをめざした。

10 月 4 日に初回ガイダンスを実施して、対象地域である奈良県吉野郡十津川村の概要を説明した後、住民への調査事項を検討するように履修生に指示した。10 月 24 日の第 2 回目の事前学習日には、履修生から具体的な調査項目を募り、日常生活の便、災害対策、子供や親戚との関係、祭りや伝統行事、食生活、方言、などさまざまな角度から十津川の社会の現状を探る計画が立てられた。

11 月 10－11 日に１泊２日で十津川村を訪問した。公用車 2 台とレンタカー１台の計３台に、教員３名と学生 13 名が分乗して出かけた。1 日目は道の駅十津川郷の地下にある「むかし館」と十津川村歴史民俗資料館で十津川村の地理や歴史・民俗を学習した後に、武蔵集落の教育資料館を見学した。教育資料館は昭和中期に利用されていた旧小学校を改築したものであり、村内住民から当時の学校や地域の話をうかがうことができた。また地図を見ながら集落内を歩き、空き家や耕作放棄地の場所を確認した。

２日目は武蔵集落の住民の方と、旧小学校の周辺を清掃しながら、同時に住民への質問も行った。集落で地域活性化協議会が活動していること、バスの本数が少ないが不便さ感じないこと、共有林を今でも維持していること、農作物への獣害が多く困っていること、など住民の生の声を聞くことができた。その後は、玉置神社、谷瀬の吊り橋を見学し、十津川村の観光地としての側面も確認することができた。

12 月 12 日に事後学習を行い、各自が十津川村で観察した事項、住民から聞き出した話などを履修生の間で共有した。現地調査の結果は、写真とともに各自でレポートにまとめて、最終的に授業の報告書を作成する予定である。

③授業成果（教員のコメント）

授業の目的を達成するためには現地協力者との事前交渉が不可欠であるが、十津川村武蔵集落での調査は本年度が初めての試みであったため、村役場の担当者との連携が上手くいかず、住民の協力が得られるかどうか、現地調査の直前まで不透明な状況であった。結果的に住民の方々の発案により、一緒に清掃活動をしながら話を聞くという、通常の調査ではできない貴重な経験をすることができた。都会育ちが多い学生たちにとっては、十津

川村の環境はまったく経験したことのないものばかりであり、メディアでは報道されないが日本には多様な地域が存在することに気づくきかっけになったと、提出レポートからうかがえる。

十津川村教育資料館の見学

十津川村武蔵集落での清掃活動

6）福祉住環境学　（担当：室崎 千重）

■住環境学基礎実習における十津川村での活動報告

①授業実施日

8月13日～14日	谷瀬集落の村づくり活動実践（盆踊り・看板整備等）
10月12日～14日	村の魅力発見調査（高森のいえ・平谷地区・笹の滝等）十津川村谷瀬集落の村づくり活動の振り返り
11月11日	高森集落の“高森のいえ”センター広場活用の試み
1月17日～18日	谷瀬集落の寄合参加、散歩道の現状調査とスタンプラリー提案
2月17日、18日	美吉野醸造にて　純米酒「谷瀬」の仕込み体験
3月14日～15日	谷瀬集落の寄合参加、散歩道スタンプラリー設置
後期随時	谷瀬集落のスタンプラリー企画の検討、木製スタンプ台・スタンプ用台紙・スタンプのデザインと製作

②授業の概要

住環境学基礎実習では十津川村谷瀬集落に通い、村の方と一緒に今後の移住・定住を見据えた村づくり活動の実践に引き続き取り組んでいる。本授業は地域課題の理解と実践を通して村づくりの方法を学生が主体的に学ぶことを目的としている。初年度からの活動の継続に加えて、毎年の履修学生が地域での気づきをもとに新たな提案を考え、実践している。継続的な活動として、谷瀬集落内のゆっくり散歩道の看板整備、古民家の休憩所“こやすば”の活用、純米酒「谷瀬」の米作りからお酒の仕込みまでの参加がある。今年度の新たな活動としては、谷瀬集落内の散歩道をもっと楽しんでもらい、集落の魅力を知ってもらうため、散歩道スタンプラリーの企画・実施と谷瀬集落の年中行事もわかる谷瀬カレンダーの製作、高森集落でのセンター広場の活用実践を行った。現地調査をもとに学生が立案し、地元の寄合での提案を経て、地域内での活動を進めている。

担当教員は室崎千重（生活環境学部）、今期は生活環境学部３回生４名と室崎研究室の学生８名が取り組んだ。

③学生の感想

学生の感想では「看板づくり、十津川木材のアクセサリーづくり、谷瀬の昔の暮らし写真展など自分たちが関わったものが地域に残せた。経験のない学生でも、地域に貢献できることに気づいた」「村の人の生活の知恵を、体験を通して学ぶことができた」「若い人の雰囲気や学生のアイデアが村にとって役に立つと言ってもらえて頑張りたいと思ったし、嬉しい」などが挙げられており、地域での実践を通しての学びが得られている。

④授業成果（担当教員からのコメント）

集落の生活体験・集落の方から聞く話を通して、学生が活動・提案を主体的に考え、提案し、実践する貴重な機会である。半年間の活動は小さいものではあるが、集落の方から喜ばれる経験を通して、学生も十分に地域貢献ができるという実感に繋がっている。継続的

な活動により、既存の提案に毎年の学生が新たな提案・見直しを行うことで、環境整備の質も向上しよいものになりつつある。集落と学生が互いに学び合い協働できる関係ができている。

谷瀬集落内のゆっくり散歩道の看板整備

谷瀬集落内の伝統行事への参加

集落内を彩る苔玉づくり

高森集落での広場活用の試み

谷瀬集落での酒米の収穫

■福祉住環境学　十津川村の高齢者の暮らしを学ぶ

①授業実施日

6月12日	学内にて十津川村概要説明、高齢者への質問項目検討
6月16日～17日 （Aグループ17名）	十津川村神納川集落の地域活動、高齢者3名のお話 高森のいえ、復興公営モデル住宅の見学、レクチャー
6月23日～24日 （Bグループ14名）	十津川村谷瀬集落の散歩道整備、高齢者2名のお話 高森のいえ、復興公営モデル住宅の見学、レクチャー
2018年7月3日	学内にてグループごとに現地での気づき、提案を発表

②授業の概要

福祉住環境学（住環境学科専門科目）の5回は、中山間地域の高齢者福祉について十津川村での学習を通して学び、課題を深く理解し解決に向けた提案を考えることを目的としている。十津川村の集落に暮らす高齢者から暮らしの様子、生活課題のお話を通して地域への理解を深め、高齢者も最期まで暮らし続けられる村づくりの実践である「高森のいえ」等の見学を行う。学生はグループごとに、地域での気づき、課題、提案を整理して発表する。担当教員は室崎千重（生活環境学部）、生活環境学部3回生31名が履修した。

③学生の感想

学生の感想レポートには、「実際に生活する人の様子から現代の福祉の意義や立ち位置を改めて確認し、今後何が必要なのか考える機会となった。」「高齢化、過疎化が進んでいたが、それ以上に素晴らしい村と感じた。」「村の人々がとても温かく、人と人とのつながりを大切にして暮らしている。」「村を良くしたいという住民の強い意志があるからこそ十津川村は人口が減っても魅力は減らないし、今よりさらに魅力的な村になることができると思う。」などが挙げられた。

④授業成果（担当教員からのコメント）

中山間地域の高齢者から暮らしの様子・地域への想いを聞き、一部ではあるが集落活動関わることで、中山間地域の課題と魅力を理解することができた。人口減少高齢化の中で、住民が活き活きと暮らすための環境づくりを考える貴重な学びの機会となっている。

高森のいえ見学

地域の高齢者のお話を聞く

■鹿と木 マルシェの開催（キャリアデザイン・ゼミナール：奈良の木　造形演習）

①授業実施日

2018年5月12日、6月2日	奈良の木でお箸づくり、スツールづくり
2018年6月30日	木工マルシェの企画案、試作
2018年10月20-21日	十津川村にて林業実習（間伐体験、木工室見学等）
2018年11月10日、17日	木工マルシェに向けた準備（インスタパネル、鍋敷き、カッティングボードの製作）、森を伝えるパンフ製作
2018年12月1日	奈良女子大学の中庭にて鹿と木マルシェの開催
2019年1月26日	鹿と木マルシェの振り返り

②イベントの概要

“鹿と木 マルシェ”は、キャリアデザイン・ゼミナール「奈良の木　造形演習」の授業の中で、奈良の木の魅力を地域の人、履修していない学生に伝えることを目的として昨年よりはじめたイベントである。学生が十津川村の杉と檜で創った木工品の素材を原価で販売し、参加者にヤスリかけ、オイル塗りの仕上げ作業を体験してもらい、作品を持ち帰ってもらう。今年は新たに鍋敷きを新たにデザインして商品として追加し、来場者に楽しんでもらえるように杉材でつくったインスタパネルとこどもが中に入って遊べるテントも学生が考えて製作した。奈良の木、そして森を知ってもらうために、商品につけるリーフレットも学生が準備した。今年も天気に恵まれ、120人を超える人がマルシェに足を運び、木に親しんだ。

③学生の感想

学生の感想では、「お客さんが笑顔で嬉しかった、運営もとても楽しかった」「お客さんが来てくれるか不安だったが、地域の幼稚園の子から年配の方まで幅広い年齢層の方に楽しんでもらえてよかった」「イベントの運営をしてみて、楽しさとともに大変さや難しさも学ぶことができ、とてもいい経験になった」「家族や友達と楽しく物作りを体験できる場を提供することはとても大切なことだと思った」「後日、作ったものを気に入って使っているとの声を聞くことができ、参加者の皆さんに楽しんで頂けたことを実感できた」などが挙げられており、学生にとっても貴重な経験となった。

④授業成果（担当教員からのコメント）

履修生が感じた木の魅力を一人でも多くの人に学生が伝えることを目標として、昨年度からはじめたイベントであるが、学生の新たなアイデアを具体化しながら地域のこども・大人が木に親しみを持つ場づくりができた。今年は十津川村での林業実習が実現し、森を守ること、木がどのように育つか、関わる人の存在を知ったうえで提案・実践に繋げられた。

十津川村での林業実習

鹿と木 マルシェの風景

イベント参加者の木工体験の様子

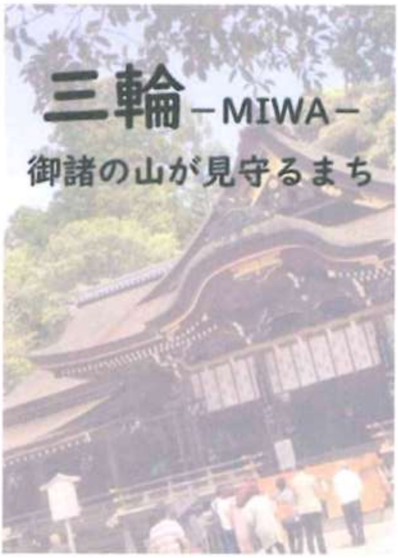
マルシェのためのパーツ準備の様子

７）現代民俗論演習　（担当：内田 忠賢）

文学部・文化メディア学コースの演習科目のうち、生活文化に関する研究論文などを精読するゼミ。ＣＯＣ＋事業に関連させ、県内の１地域を理解することを目的に、先行研究を批判的に読んだ。今年度は、桜井市三輪門前町を理解するため、①宗教都市、②日本の門前町、③三輪門前町の３段階のカテゴリーで先行研究を精査し、精読した。その学習成果を、現地でのフィールドワーク（文化メディア学実習Ｂ）に生かし、その成果を調査報告書として刊行した。

８）文化メディア学実習Ｂ　（担当：内田 忠賢）

文学部・文化メディア学コースの実習科目のうちＢでは毎年、取材実習を行い、報告書を作成する。体験学習だけでなく、コンテンツ制作を行う。マスコミは勿論、文化発信を仕事とする自治体業務などを念頭に置いている実習である。ＣＯＣ＋事業に関連させ、県内の１地域をフィールドに取材実習を行う。今年度、フィールドとして桜井市の三輪門前町を設定した。履修生たちは自分たちで設定した取材テーマに沿い、２～３人のグループに分かれ、現地にて積極的に取材を行った。その成果を報告書にまとめ刊行した。なお、専門科目「現代民俗論演習」において先行研究等を批判的に精読し、本演習を実りあるものにした。



目次

まえがき・・・一
お世話になった方々・編集者・・・二
大神神社への参拝者
六月一日　大神神社に参拝して・・・三
豊年講のついたち朝市・・・五
親子三世代で行く大神神社参詣・・・七
パワースポットとしての大神神社
三輪山の神々と門前町の人々の信仰・・・九
狭井神社と人々～御神水や神体山・三輪の祭り～・・・十一
三輪山でのスピリチュアル体験・・・十三
三輪の食
食から見る三輪の名産・・・十五
三輪素麺のおいしさの秘密・・・十七
三輪素麺の魅せ方を考える・・・十九
ゲストハウス
町家ゲストハウスみもろの運営・・・二十一
「町家ゲストハウスみもろ」を利用する外国人宿泊客・・・二十三
三輪観光の現状と課題・・・二十五
三輪門前町に住む人々－まちを守る意識－・・・二十七
オフショット・・・二十九
参考文献・・・三十一
編集後記・・・三十六

9）歴史学実習　（担当：西谷地 晴美・田中 希生・西村 さとみ・矢島 洋一）

①履修者：７名　　任意参加院生：７名　　担当教員：４名

②本年度の歴史学実習（後期）では、履修予定者と任意参加院生による「夏期学生現地調査」と、２泊３日の「歴史学実習」を実施した。

「夏期学生現地調査」の概要は以下のとおりである。

A．９月９日～11 日に、院生２名が、吉野郡十津川村不動滝・大宮神社・歴史民俗資料館・高滝神社・天辻本陣跡等を調査。

B．９月 14 日に、院生３名が、丹生川上神社中社・東吉野村民俗資料館・天誅組関連史跡等を調査。

C．９月 29 日に、履修予定者４名が、大和丹治城跡・本善寺・十二社神社・宮滝遺跡・吉野歴史資料館等を調査。

D．９月 29 日に、履修予定者３名が、吉野神宮、金峯山寺、吉野朝宮跡、吉水神社、如意輪寺等を調査。

この「夏期学生現地調査」は、調査地・調査対象・移動ルート・交通手段など、調査計画のすべてを、履修予定者および任意参加院生が自主的に計画して実施したものであり、参加学生・院生の吉野地域に対する問題関心が明確化し、高い教育効果を生み出した。

11 月 12 日～14 日に実施した「歴史学実習」の概要は以下のとおりである。

12 日：奈良市 → 室生寺 → 龍穴神社 → 大野寺 → 旧旅籠あぶらや → 長谷寺 → 森野旧薬園 → 宇太水分神社中社 → 竹林院群芳園

13 日：金峯山寺 →（金峯山寺バス停…路線バスで移動…奥千本口バス停）→ 西行庵 …金峯神社…吉野水分神社…勝手神社…殿出 → 丹生川上神社下社 → 洞川温泉

14 日：龍泉寺 → 大峯山女人結界門 → 天河大弁財天社 → 賀名生歴史民俗資料館 → 西吉野城戸 → 下市町平原の辻 → 熊野神社 → 願行寺 → 千石橋 → 奈良市

この歴史学実習には、履修生７名が参加し、大学院生７名がＣＯＣ＋事業－中期計画関連で同行した。授業担当教員４名が引率し、12 日のみ他教員１名が参加した。今回の歴史学実習は、吉野の西行庵から下市町の殿出までを、すべて歩いて調査することで、南北朝期の南朝勢力の吉野脱出ルートを考える内容を盛り込んだ。また、大峯山女人結界門を見学することで、女性と宗教との関係を象徴的空間で考えることができるように配慮した。

１０）地域居住学　（担当：中山　徹）

【目的】

地域居住学では本学と包括協定を結んでいる野迫川村をフィールドとし、山村での暮らし、仕事を学生が現地に行き、現地の方と交流して実践的に学ぶことを目的としている。

【内容】

以下のようなスケジュールで実施した。

①10 月 23 日（火）、講義、場所：大学

野迫川村の概要、日本の過疎地について、紀伊半島大水害（2011 年）の状況及び復興について、フィールドワークの説明

②10 月 27 日（土）～28 日（日）、フィールドワーク、場所：野迫川村

27 日：本学卒業生で野迫川村役場に勤務する方の講義

28 日：4 班に分かれ野迫川村でヒアリング。ヒアリング先は、野迫川村漁協、ホテル野迫川、民宿かわらび荘、津田林業、いなか食堂、しいたけ栽培所、野迫川村猟友会等。野迫川村での暮らし、仕事を中心に伺った。

③10 月 30 日（火）、ワークショップ、場所：大学

フィールドワークの成果をパワーポイントにまとめ発表した。

【講評】

毎年、野迫川村を訪問しているがフィールドワークの内容は変えている。今年は野迫川村内の職場を回ったが山村での仕事が理解でき有益であった。野迫川村のような山村を訪問した経験がある学生はごく一部であり、山村の状況についても理解が深まったと思われる。

（6）「『奈良』女子大学入門」における地域志向に関する学生の意識調査

教養教育科目「『奈良』女子大学入門」の履修生を対象に、平成 30 年 7 月に「地域（奈良）への関心」に関するアンケート調査を実施した。

「『奈良』女子大学入門」は平成 30 年度から開講した地域志向科目で、奈良女子大学で学び、安全で充実したキャンパスライフを送るために必要不可欠な内容をオムニバス形式で講義するもので、今年度は１・２回生を中心に 662 名が履修した。

学生の意識調査に際しては、学部、学年、出身地の他、地域への関心、地域への問題意識、地域への居住、地域との交流意思、地域内での産官学の連携といった 5 つの領域から 10 件の質問項目を設け、それぞれ６つの回答文言を設け無記名で実施した。

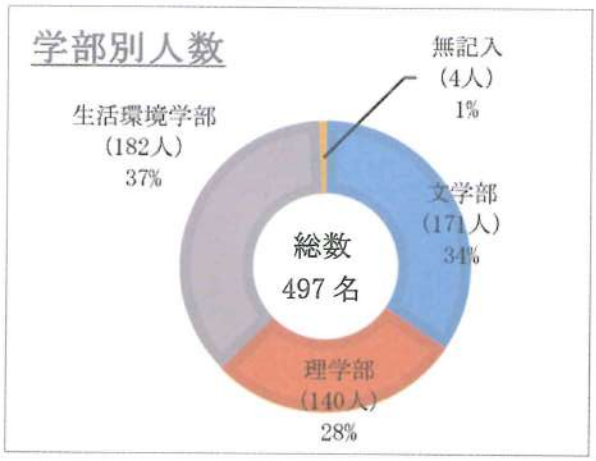
履修者数（人）	662
有効回答数（人）	497
有効回答率	75%

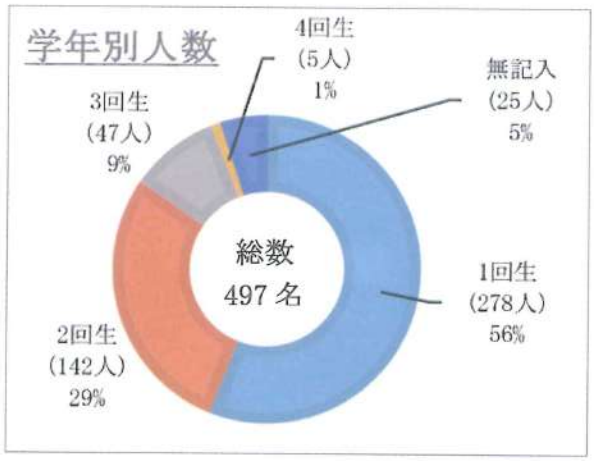
＜調査結果＞

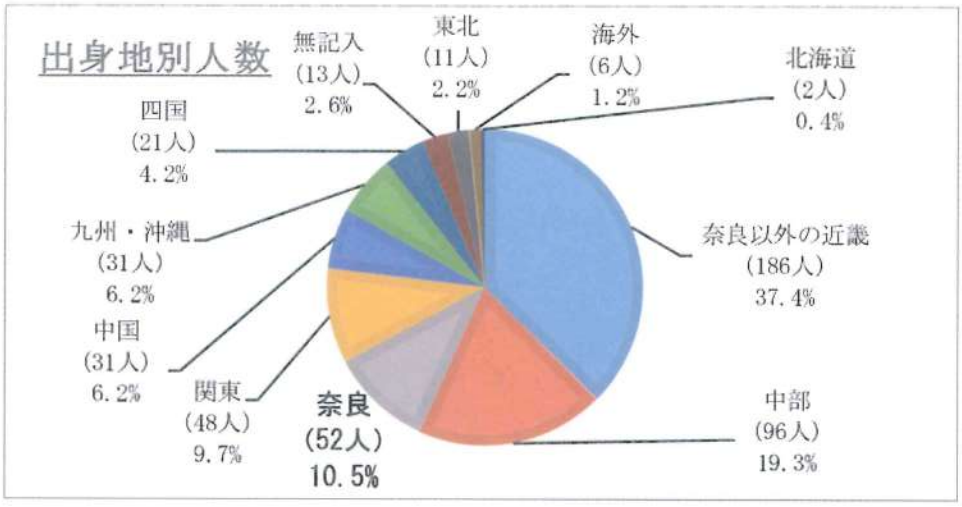
１）全体の構成

学部別・学年別人数については以下のとおりである。学部別人数においては、ほぼ均等に分散している。学年別人数においては、今回調査の対象であった「『奈良』女子大学入門」の科目の特性上１・２回生が８割以上を占めている。

次に出身地別で比較した結果、最も多かったのは奈良県以外の近畿出身者で全体の４割近くを占めていた。次いで中部、奈良県の順となり、全体に占める奈良県出身者は約 10%で、これは他府県出身者が９割を占める本学の特徴に一致している。







2）「奈良」に対しての意識（質問項目と入力数値）

学生の意識調査の分析において、「あてはまる」には+３、「どちらかといえば当てはまる」には＋１を、「あてはまらない」には－３、「どちらかといえば当てはまらない」には－１とするデータ処理のための入力値を設けた。なお、「どちらともいえない」ならびに「該当しない・不明」は数値を０として除外した。

質問項目

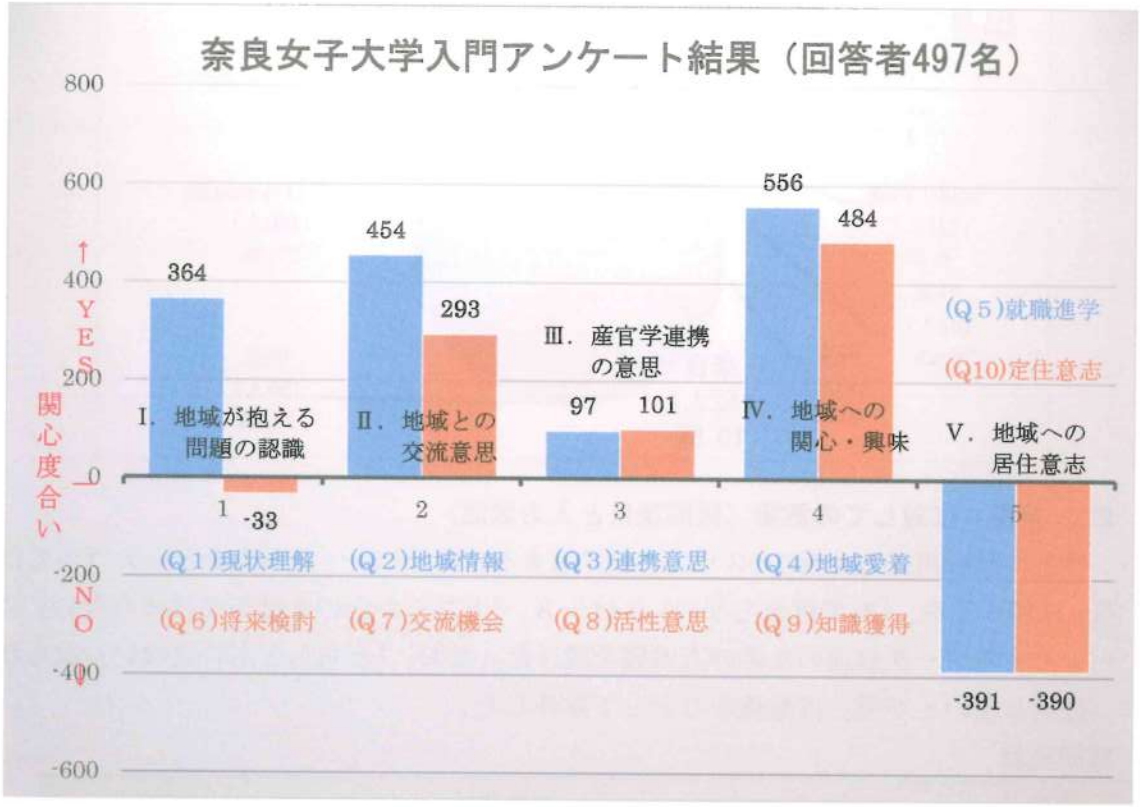
略称	質問項目
現状理解	(1) 奈良が現在抱えている問題について理解するようにしている
将来検討	(6) 奈良の将来はどうあるべきかを考えている
地域情報	(2) 奈良で行われている地域イベント等に興味をもっている
交流機会	(7) 地域住民と自分自身が交流する機会が重要だと思
連携意思	(3) 奈良の企業との連携を意識した学習・研究を行いたいと思う
活性意思	(8) 奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思う
地域愛着	(4) 奈良が好きである
知識獲得	(9) 奈良の歴史・伝統や観光地・名所などについて知ろうとしている
就職進学	(5) 奈良県内で就職・進学する予定である
定住意志	(10) 将来的に奈良に住むつもりである、もしくは住み続ける予定である

（参考）質問項目は平の調査報告を参考にし、「大阪」から「奈良」に変えた。
平知宏(2017)大阪市立大学における「地域志向系科目」導入に伴う学生意識の在り方.
大阪市立大学『大学教育』、15(1)、1-9

６つの回答文言とデータ処理時の入力数値

各質問項目に対する回答文言	データ処理時の入力値
あてはまる	3
どちらかといえばあてはまる	1
どちらともいえない	0
どちらかといえばあてはまらない	-1
あてはまらない	-3
該当しない・不明	0

3）集計結果



「Ⅳ．地域への関心・興味」並びに「Ⅱ．地域との交流意思」については非常に高い。また、「Ⅰ．地域が抱える問題の認識」では、地域が抱える問題への意識は高いものの、奈良の将来について具体的にどうあるべきかを考えている学生は少ないという結果となった。「Ⅲ．産官学連携の意思」において、産官学連携への関心は高いとは言い難く、さらに「Ⅴ．地域への居住意志」では、奈良への居住意志が非常に低いことが分かった。

領域ごとの回答分布状況は以下のとおりである。

「Ⅰ．地域が抱える問題の認識」について

(1) 奈良が現在抱えている問題について理解するようにしている

「あてはまる」が 78 人、「どちらかといえばあてはまる」が 224 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 34 人、「あてはまらない」が 20 人回答した。

(6) 奈良の将来はどうあるべきかを考えている

「あてはまる」が 40 人、「どちらかといえばあてはまる」が 111 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 108 人、「あてはまらない」が 52 人回答した。

本学は他府県出身者が多く、「奈良が現在抱えている問題」について多くの学生が理解しようとしていることが窺えるが、「奈良の課題は、出身県の課題でもある」と捉えている学生が多く、奈良での居住意志が非常に低いことが、奈良の将来をどうあるべきかと考える学生は少ない結果となっていると考えられる。

「Ⅱ．地域との交流意思について」について

(2) 奈良で行われている地域イベント等に興味をもっている

「あてはまる」119 人、「どちらかといえばあてはまる」が 194 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 40 人、「あてはまらない」が 19 人回答した。

(7) 地域住民と自分自身が交流する機会が重要だと思う

「あてはまる」が 77 人、「どちらかといえばあてはまる」が 174 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 49 人、「あてはまらない」が 21 人回答した。

多くの学生が学びの場所でもある奈良で行われている地域イベント等に興味をもっており、地域との交流意思が重要と考える学生は多いといえる。

「Ⅲ　産官学連携の意思」について

(3) 奈良の企業との連携を意識した学習・研究を行いたいと思う

「あてはまる」が 53 人、「どちらかといえばあてはまる」が 125 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 76 人、「あてはまらない」が 37 人回答した。

(8) 奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思う

「あてはまる」が 48 人、「どちらかといえばあてはまる」が 140 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 69 人、「あてはまらない」が 38 人回答した。

奈良の企業との連携や奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思う学生は存在するが、学習・研究が具体化していないことから数値は低くなったと思われる。

「Ⅳ　地域への関心・興味について」について

(4) 奈良が好きである

「あてはまる」138 人、「どちらかといえばあてはまる」が 202 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 21 人、「あてはまらない」が 13 人回答した。

(9) 奈良の歴史・伝統や観光地・名所などについて知ろうとしている

「あてはまる」111 人、「どちらかといえばあてはまる」が 225 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 32 人、「あてはまらない」が 14 人回答した。

奈良に興味がなく、奈良を知ろうとしない学生の割合は 10%に過ぎず、非常に多くの学生が奈良への関心・興味を持っている。

「Ⅴ　地域への居住意志について」について

(5) 奈良県内で就職・進学する予定である

「あてはまる」が 34 人、「どちらかといえばあてはまる」が 44 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 111 人、「あてはまらない」が 142 人回答した。

(10) 将来的に奈良に住むつもりである、もしくは住み続ける予定である

「あてはまる」が 34 人、「どちらかといえばあてはまる」が 49 人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が 97 人、「あてはまらない」が 148 人回答した。

質問項目の中で「どちらともいえない」と回答した学生について

(1) から (10) の質問項目の中で、「どちらともいえない」と回答した学生は、(3) 奈良の企業との連携を意識した学習・研究を行いたいと思うが 181 人、続いて (8)　奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思うが 175 人、(6) 奈良の将来はど

うあるべきかを考えているが 161 人の順であった。要因として履修学生の多くが１・２回生で、奈良への興味・関心が高いものの、県内企業に触れる機会がなく、専門的な学習・研究がスタートしていないことなどが考えられる。

４）まとめ

今回は１・２回生の履修が多い『奈良』女子大学入門の履修者を対象としたアンケートであり、地域が抱える問題を理解しようとする学生が多いことは地域志向科目導入の成果と言えよう。一方、奈良の将来はどうあるべきかを考える学生は少なく、地域への居住意志については極端に低い（悪い）ということも読み取れる。地域を知り、地域に学ぶという地域志向科目は整備されたとはいえ、高年次学生に向けた専門教育プログラムの中で、行政・県内企業が協働した地域志向教育カリキュラムの構築、奈良の企業と連携した学習や研究ならびに奈良の活性化につながるような学習・研究といった「地域とのより深い学習」の機会を増やすことにより人材の定着、地域への居住意志への向上につながることが期待できよう。また、学生の「地域への居住意志」を育むためには異なるアプローチも併用する必要があり、今後、若者の地域への定着を進めるにあたり、「なぜ、若者が奈良に住みたくないのか」、「県内企業、行政をも含めた地域の若者の受け手側にかかる課題とは何か」といった新たな観点を含めて検討することが必要となろう。

（7）地域志向科目の必修化に向けて

地域志向科目とは、「奈良女子大学的教養」の理念に掲げられた問いのうち、“奈良で学ぶことを通じてあなたは世界にどんな貢献ができますか？”“大学で学ぶことはあなたと未来の世代の人たちにとってどんな意味がありますか？”を具体的に問いかけることを目的としている。奈良というフィールドにおいて、“社会的実践に飛び込む”“本物にふれる”“他者と学ぶ、他者から学ぶ”などのアプローチを駆使することによって、問題を解決する能力を養い、さらに専門学の深い学びへとつなげるべく、授業展開を行っている。

本学では事業が採択された平成27年度以降、全学共通教養教育科目及びキャリア教育科目、各学部専門教育科目の中からこれらの要素を持つ科目を括り出し、また新規開講し、学生に対して積極的な履修を呼びかけてきたところである。

その一方、地域志向科目はＣＯＣ＋事業採択の条件として、「全学生が卒業するまでに一度は履修できる体系的なカリキュラムの構築を各大学で創意工夫すること（平成27年3月ＣＯＣ＋事業Ｑ＆Ａ）」とされており、本学においてどのような形で上記の条件を満たすことが可能となるか、ＣＯＣ＋推進機構教育改革部門において検討を重ねてきた。そして全学組織である教育計画室及び各学部教授会の議を経て、20科目（一部はクラス分けされているが、ここでは各学部規程に記載される科目数をいう。）を地域志向科目として指定し、文学部、理学部、生活環境学部の各学部規程に明確に位置づけ、平成31年度以降の入学生が、卒業するまでに指定された科目のいずれか１科目以上を必修とすることが決定された。

卒業要件として指定された地域志向科目は以下のとおりである。

分類	授業科目	単位	学期	備考
地域志向科目	「奈良」女子大学入門	2	前期	教養教育科目
	パサージュ（一部のクラスが該当）	1	不定期	
	なら学	2	前期	
	なら学＋（プラス）	2	後期	
	環太平洋くろしお文化論	2	後期	
	なら学概論B	2	後期	文学部専門教育科目
	地誌A	2	前期	
	文化人類学特殊研究	2	後期	
	なら学フィールドワーク実習	1	前期	
	コミュニティ・リサーチ	1	前期	
	コミュニティ・アクション	1	後期	
	なら学演習	2	後期	
	地域探究実践演習	2	後期	
	地域社会の課題演習	2	後期	
	サイエンス・オープンラボⅠ	2	不定期	理学部専門教育科目
	サイエンス・オープンラボⅡ	2	不定期	
	森林生物学野外実習	1	前期	
	河川生物学野外実習	1	前期	
	地域連携運動演習	2	後期	生活環境学部専門教育科目
	地域居住学	2	後期	

（8）アントレプレナー講座の開講（平成31年度）

起業マインド醸成のため、女性起業家によるセミナー等を実施してきたが、さらなる起業マインドを養成のため、平成31年度アントレプレナー講座の開講に向けた準備を進めている。概要は以下のとおりを予定している。

授業タイトル

「ビジネスプラン」の作り方演習 - アイデアだけでは終わらせない！

授業概要

「ビジネスプラン」は事業を展開する際の指針となる計画案であり、内部関係者で確認、共有するだけではなく、金融機関や投資家等の外部関係者に意図を伝えて、協力・支持を得るために必要不可欠な書類である。本授業では、「ビジネスプラン」の構成要素を理解したうえで、履修生自身の「アイデア」を素材に、履修生相互の観点を交差させ、専門家のアドバイスを得ながら、プラン作成のプロセスを具体的に経験する。

授業計画

第１回　ビジネスプランの必要性について
　　ビジネスプランを作成するための意義の理解を深める

第２回　ビジネスプランの書き方のノウハウについて
　　ビジネスプラン作成にあたってのポイントを身に付ける

第３回～第４回　ビジネスプランを考える
　　アイデアを実行可能な具体的なビジネスプランにしてみる
　　顧客視点、論理的な事業展開などを身に付ける

第５回～第６回　作成したビジネスプラン発表ならびに意見交換
　　ビジネスプランを発表し、講師・履修生と一緒にブラッシュアップを行う
　　競争優位性やマーケティング、将来ビジョンなどを中心に意見交換・情報交換

第７回　ビジネスプランの改良
　　業績計画や資金計画など数値への信頼性を高める

第８回　改良したビジネスプランへの外部評価と振り返り
　　外部講師からの評価を受けて、実際のビジネスプランコンテストへのチャレンジを促す

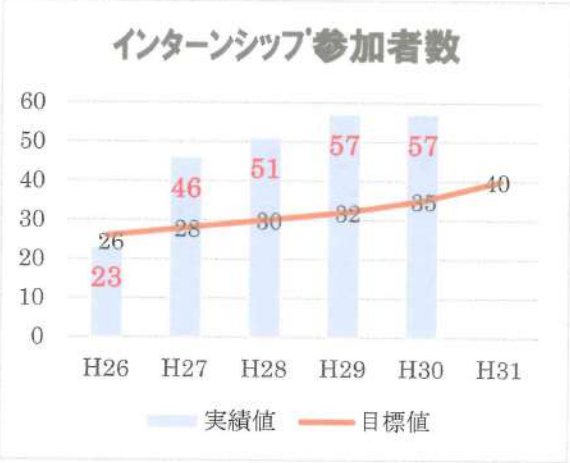
２．２　就職（企業との関わり）について

総　論

平成 30 年度はＣＯＣ＋事業最終年度卒業予定の学生が３回生を迎えた。１回生ならびに３回生の就職意識調査を実施し、その分析結果に基づき、奈良県内中小企業の周知に努めた。教職員ならびに３回生向けへの県内企業紹介リーフレットの配布、３回生向けメールマガジン等情報を発信するとともに、県内企業ならび県内自治体セミナー、ＯＧとの交流会、県内優良企業７社への個別会社見学など、就職支援行事の開催にも力を入れた。

（１）事業協働地域就職率ならびにインターンシップ参加者数の推移

		H26	H27	H28	H29	H30	H31
県内就職	目標値	30	32	33	35	39	62
	実績値	30	22	32	35	34	
ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ	目標値	26	28	30	32	35	40
	実績値	23	46	51	57	57	



	H26	H27	H28	H29	H30	H31
卒業者数	538	526	524	510	510	
全就職者数	323	320	334	321	298	
うち奈良県出身者	33	31	21	33	27	
地域内就職者数	30	22	32	35	34	
うち奈良県出身者	12	10	7	11	10	
うち県外出身者	18	12	25	24	24	

○インターンシップ参加者数

・奈良県大学連合インターンシップは平成 11 年にはじまり、現在は、奈良県下 57 企業・団体に学生を受入れていただいており、本学は当初からこのインターンシップに参画している。ＣＯＣ＋事業の実施を機に参加学生だけなく、協力企業の増加にも努め、インターンシップ参加者数は計画以上に推移している。ＣＯＣ＋事業の開始により学生の県

内企業に対する認知度が向上し、関心を持つ学生が増えてきたことを示している。

○地域内就職者数

・事業協働地域内就職率 10%アップのための最終年度の目標値は 62 名となり、ハードルが非常に高くなっている。

・本学の特徴として、9 割が他府県出身者であるという点に加えて、卒業生の約 6 割が就職し、他の卒業生は主として本学大学院に進学している。

・奈良県出身者は約 3 分の 1 が奈良県に残り、3 分の 2 が県外に流出していることから目標達成には、「奈良県出身者を県内に留め、県外出身学生を一人でも多く奈良県内に留める」ことが必要となる。

・実質的にＣＯＣ＋事業が開始した平成 28 年度以降、インターンシップの強化や県内企業紹介リーフレットの作成・配布の他、ＣＯＣ＋コーディネーターによる学生を帯同した会社訪問等の就職支援プログラムが浸透したことから県外出身者の地域内就職者は着実に増加している。

・従来から就職実績のあった自治体・県内企業のみならず、ＣＯＣ＋事業開始後の新たな県内中小企業開拓の結果、これまで採用実績が無かった 16 社に本学学生が 17 名入社するなど、当該事業の成果が表れている。

H27　㈱鞄工房山本、光洋サーモシステム㈱、大同化学工業㈱、㈱大和農園
H28　㈱イベント 21、上六印刷㈱、クオリカプス㈱、奈良県信用保証協会、
　　南都コンピュータサービス㈱、㈱吉川国工業所
H29　㈲井上企画・幡、東洋スクリーン工業㈱、㈱十川ゴム奈良工場、国広産業㈱
H30　奈良県民共済生活協同組合、㈱マイ工務店　　（H31.1 現在）

（２） １回生の就職意識アンケートの実施

本学に入学後ほぼ１年を経過した１回生を対象に、主に奈良県内で就職することに対し現時点でどのような考えを有するかを尋ね、今後の事業展開の参考とするためにアンケート調査を実施した。概要および結果は次のとおりである。

１）概要

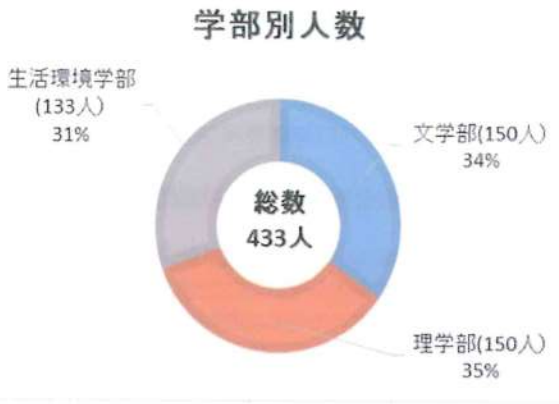
調 査 名：「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業（ＣＯＣ＋)」に関するアンケート
調査対象：必修科目である健康運動実習Ⅱ（Ａ）～（Ｎ）を履修する１回生 519 人
調 査 日：平成 31 年 1 月 29 日から 2 月 4 日の間の各科目開講時
調査方法：質問紙調査（集合調査法）・無記名回答
有効回答数　　433 人　　有効回収率　　83%

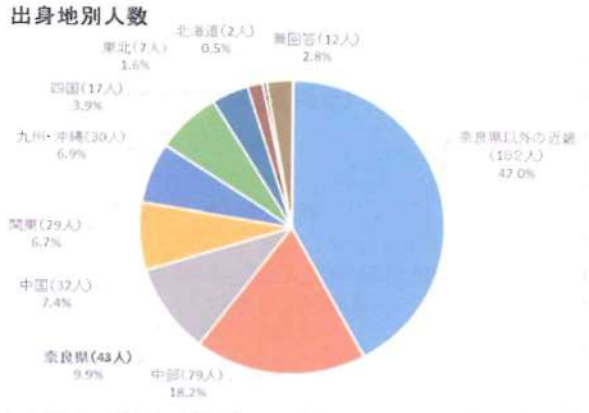
尚、回答者のうち地域志向科目の履修者は 奈良女子大学入門 279 人、なら学 120 人、なら学プラス 121 人、３科目とも履修しなかった者 93 人であった。

２）調査結果

①全体の構成

学部別の人数は次のとおりほぼ均等である。次に、対象者を出身地別に分類すると奈良県以外の近畿が最も多く全体の４割以上を占め、次いで中部、奈良県の順となった。全体に占める奈良県出身者の割合は 10%で、他府県出身者の割合が非常に高い。



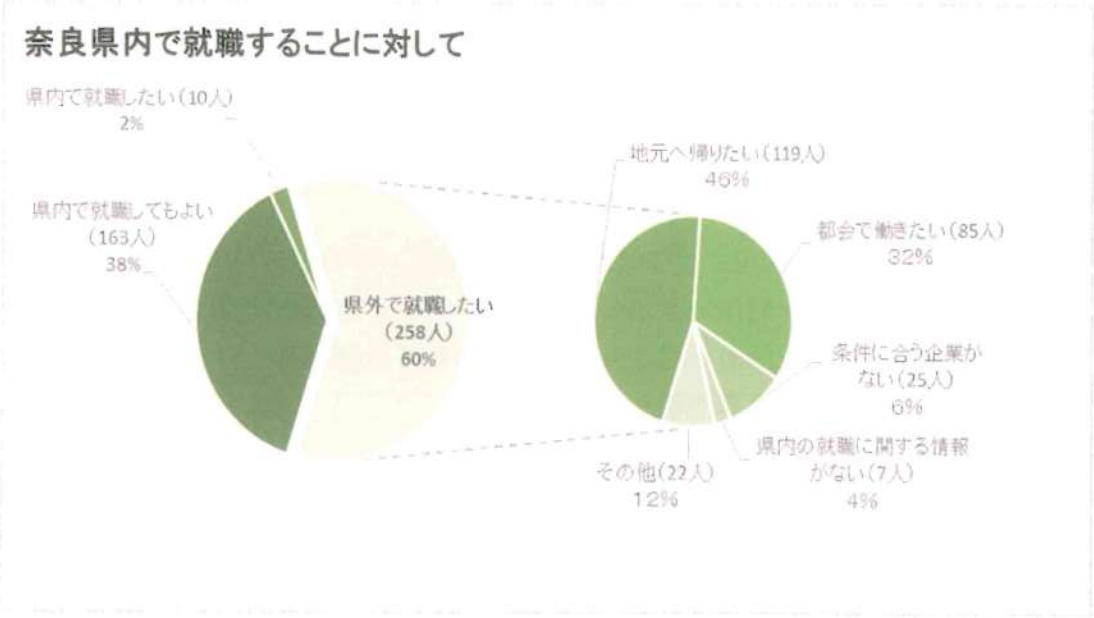


尚、母数の少ない北海道出身者（２人）と東北出身者（７人）について、以降の集計ではこの２地域を合わせ「北海道・東北」（９人）として取り扱う。

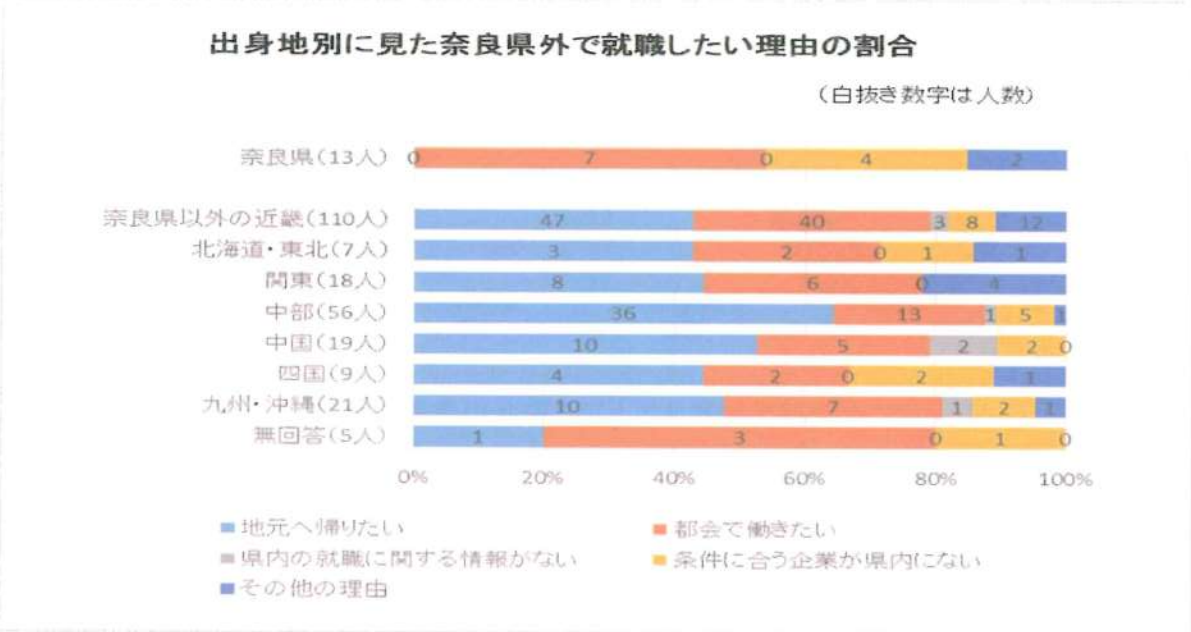
②奈良県内で就職することに対する意識

現時点において、奈良県内で就職「したい」と積極的な回答をした学生は 10 人とわずか２%である。そこに奈良県内で就職「してもよい」と答えた者を加えても過半数には届かず、約６割の学生が県外での就職を希望していることがわかった。その理由について、半数近くが「地元へ帰りたいから」と答えており、先に示したように奈良県以外の地域からの入学者が全体の９割以上を占めるところが大きな要因の一つに挙げられる。就職をはじめとした奈良県への定着促進あたっては、これらの学生に対して如何に奈良県への

関心と愛着を持たせることができるかが重要であると言える。



一方、奈良県外で就職したい、つまり奈良県内での就職を希望しない理由では「地元への回帰意識」のほかに「都会で働きたい」という希望が大きな割合を占める。以下、「条件に合う企業が県内にない」との回答数が増加した。他に「賃金が安い」、「通勤に遠い」や「奈良に住みたくない」との記入もあった。また、奈良県出身者では「都会で働きたい」や「生まれてずっと奈良、奈良県を出たい」との地元脱出願望や「条件に合う企業がない」との声も聞かれた。



③まとめ

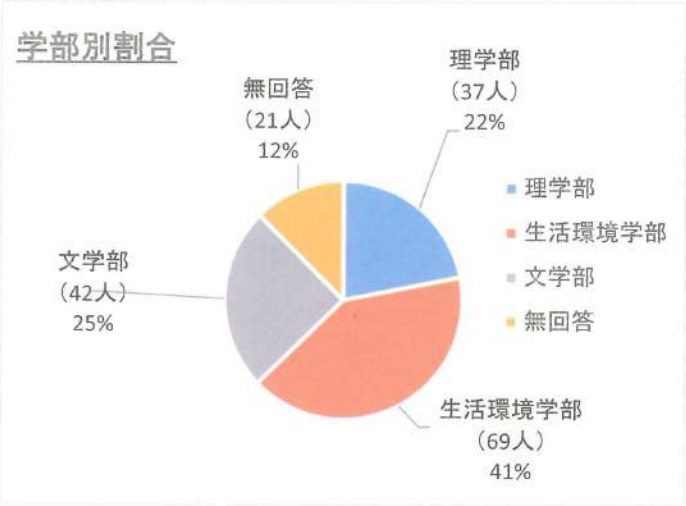
今回の調査を通して、現時点で１回生は卒業後の進路として奈良県内での就職を積極的に志望する意思は高くないことがわかった。しかし同時に４割近くの学生がまだ選択肢としては排除していないことも明らかである。ただ、県外での就職を希望する理由の中には「入りたい企業が県外にある」、「交通の便が悪い」、「通勤に遠い」、「賃金が安い」といった奈良の企業に対する期待値の低さや企業情報の無知、そして「わざわざ奈良で仕事をしようとは思わない」、「奈良に住みたくない」のように「奈良そのものに対する魅力を感じていない」との声のあったことも事実である。もともと奈良県は生活の利便性や有名企業数で圧倒的に上回る大阪や京都といった大都市に近接している点が就職先の選定にあたっては不利になる側面は否定できず、とりわけ実家や居住地がそうした都心近くにある場合はあえて距離の離れた奈良県へ「出てくる」モチベーションが上がり難いことも理解しうる。

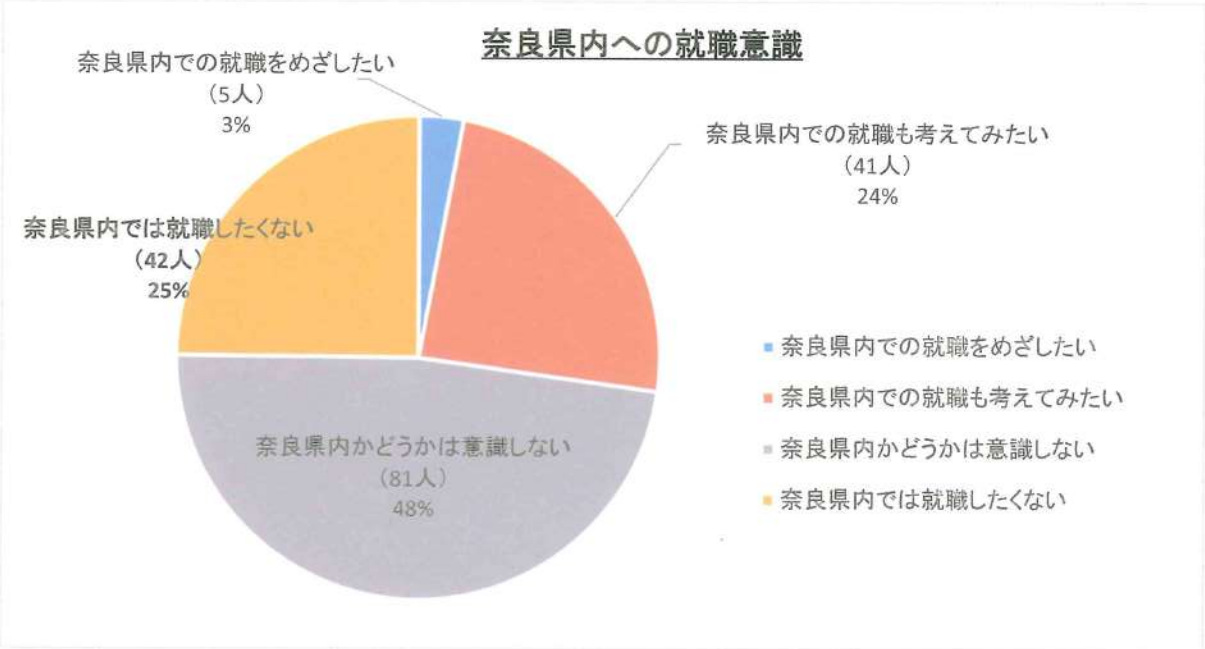
以上のことから、奈良県内の就職に関する情報を的確かつ効率的に伝えることがまず大切ではあるが、１回生であれば就職を本格的に意識し始めるまでには時間的な余裕も見いだせ、より学生の目線に近いところで「奈良そのもの」への興味を掻き立て、自身が関わりを持てるような情報や機会も併せて継続的に提供すれば、そこから「奈良県に根を下ろそう」という気持ちを育み、県内にある企業にももっと目を向けてくれる余地はまだ大きく秘められていると考えたい。

（３） ３回生の就職意向についてのアンケートの実施

平成 30 年 4 月に３回生全員（533 名）を対象に就職意向についての記名式のアンケート調査を実施した。回答者は 169 名（回答率：31.7%）であった。奈良県内での就職を目指したいとする学生は５人、奈良県内での就職も考えてみたいとする学生は 41 人、奈良県内かどうかは意識しない学生が 81 人であった。

今回のアンケートの側面として、奈良県内への就職意識を高めるため、やまと共創郷育センターが実施するイベント情報や県内企業の情報を希望する学生を集めることにあり、90 名以上の学生がメールでの奈良県内企業情報の受信を希望し、後述するメールマガジン「やまじょぶだより」につながった。





（4）やまじょぶだより（メールマガジン）の発信

ＣＯＣ＋事業を一層効果的に展開するための一助として、３回生を対象にやまと共創郷育センターの就職支援事業や県内企業に関する情報などを直接メールでお知らせするメールマガジン「やまじょぶだより」の配信をスタートした。（対象者３回生　90 名）

おおむね月１～２回程度のペースでの配信を計画、就職に関する情報だけでなく地元奈良の時節に合わせた情報など硬軟織り交ぜ、できるだけ学生が読みやすく興味を持つような内容にて展開中である。本年度は号外を含め 13 回の配信を行った。

	号	発信日	概要
1	第0号	2018/4/27	やまじょぶ登録3回生向け（配信登録のお礼も兼ねて）
2	第1号	2018/5/11	6月の県内業界研究会（6/6,6/14,6/19）と7月のOGに聞こう（7/3,7/4）のお知らせ
3	号外	2018/5/18	上記　県内業界研究会（6/6,6/14,6/19）の参加者募集
4	第2号	2018/6/1	県内業界研究会（6/6,6/14,6/19）の参加者の再募集
5	第3号	2018/6/8	県内業界研究会の6/6の結果紹介と6/14,6/19の参加者再募集
6	第4号	2018/6/15	県内業界研究会6/19再募集とOGに聞こう（7/3,7/4）参加者募集
7	第5号	2018/6/29	OGに聞こう（7/3,7/4）の再募集
8	第6号	2018/7/13	OGに聞こう（7/3,7/5）の結果紹介とポジティブ変換
9	第7号	2018/10/10	県内企業見学会のお知らせ①（当初の通知）
10	第8号	2018/10/19	県内企業見学会のお知らせ②（クオリカプス、DMG森精機に的を絞って）
11	第9号	2018/11/13	県内企業見学会のお知らせ③（DMG森精機、三笠産業、MSTに的を絞って）
12	第10号	2018/12/18	バスで行く、奈良女・奈良高専・奈良県立大合同企業見学会
13	第11号	2019/1/15	南都銀行3daysインターンシップ募集の案内

「やまじょぶだより」配信一覧

（5）県内企業紹介リーフレットの配布

本学は他府県出身者が９割を占めており奈良県出身者が非常に少ないこと、また、上場企業が４社しかなく、学生における県内企業の認知度も低いことから、事業開始以降、「県内企業限定紹介コーナー」をラウンジに設置し、県内企業の周知に努めてきた。

その一環として、今年度は４月に３回生全員に県内企業紹介リーフレットを作成・配布した。このリーフレットの大きな特徴は、単に企業名を掲載するのではなく、平成24年度以降に本学からの新卒入社実績のある企業に‘花のアイコン’で印をつけていることである。これにより多くの先輩が県内企業で活躍していることが分かり、県内企業をより身近に感じてもらえるよう工夫をした。(リーフレット記載企業数　117社、うち本学生入社企業数　56社)

引き続き、県内企業周知のため、2019年度版（改訂）も新たに作成し、新３回生全員に配布するよう準備を行っている。

県内企業紹介リーフレット

（６）平成 30 年度実施の就職支援活動例

１）奈良県内企業の魅力を紹介する業界研究会

平成 30 年 6 月 6 日（水）、14 日（木）、19 日（火）

平成 30 年度に新たに企画・実施した就職支援事業である。県内にはＢtoＢ企業が多いことから、この業界研究会では、企業の担当者から業界や自社の魅力を 5 分間でスピーチいただき、その後、学生が企業テーブルへ移動して、フェイスツーフェイスで話を聞いたり質問したりする時間とした。３日間の参加企業は 20 社、参加学生 58 名となり、県内にそれぞれ特色のある魅力的な企業がたくさんあることを学生に周知させる良い交流の機会となった。
学生からは、「少人数で気軽に話が聞けてとても良かった」、「気になっていた企業から詳しい話が聞けて、良い経験となった」、「もっと話を聞きたかった」などの意見の他、企業からは、「学生との対話の中で、日頃気が付かない学生からの目線に、改めて気が付く有意義な時間となった」等の意見があった。

県内企業研究会　告知チラシ

実施日	参加企業	参加者
6 月 6 日(水) 6 社	㈱井上天極堂【食品業】、岡村印刷工業㈱【印刷業】、河村繊維㈱【繊維業】、国広産業㈱【樹脂加工業】、クオリカプス㈱【製造業】、(社福)ぷろぼの【社会福祉事業】	13 名
6 月 14 日(木) 7 社	上六印刷㈱【印刷業】、㈱ＭＳＴコーポレーション【製造業】、岡本㈱【繊維業】、ダイシン化工㈱【樹脂加工業】、ディライト㈱【サービス業】、奈良テレビ放送㈱【放送事業】、名阪食品㈱【食品業】	23 名
6 月 19 日(火) 7 社	スケーター㈱【キャラクター用品製造】、辰巳電子工業㈱【製造業】、田村薬品工業㈱【製薬業】、西垣靴下㈱【繊維業】、ホテル日航奈良【宿泊業】、㈱三輪山本【食品業】、㈱明新社【印刷業】	22 名

2）県内企業ＯＧとの交流会 in ラウンジ～先輩に聞こう！～

平成 30 年 7 月 3 日（火）、4 日（水）

本学総合研究棟Ｓ棟内ラウンジにおいて県内の企業等に就職する先輩（ＯＧ）と本学学生との交流会を実施した。２日間の参加ＯＧは 14 名、参加学生 22 名となり、先輩方の仕事のことやオフの過ごし方など、多方面にわたる事柄について学生が知る良い機会となった。交流会では、まずＯＧから自己紹介を兼ね２分間のスピーチを行い、その後、ＯＧが各テーブルに座り、学生とフェイスツーフェイスで話を聞いたり質問したりする時間として構成した。

学生からは、「先輩方から貴重なお話をいただけてとても良かった」、「とても話しやすい環境だった」、「思っていた企業さんとお話ができて大変満足」、「気軽に質問できる雰囲気がすごく良かった」などの意見の他、ＯＧからは、「学生の率直な意見が聞けて良かった」、「１回生の参加もあり、就職意識の高さに驚いた」、「皆が真面目に聞いてくれ、少しでも役に立てれば嬉しい」、「自分を見つめ直し、初心に戻る良い機会になった」等の意見があった。

実施日	参加ＯＧ	参加者
7 月 3 日（火）	奈良県庁、奈良県警察本部、奈良市役所、㈱南都銀行、クオリカプス㈱、奈良テレビ放送㈱	15 名
7 月 4 日（水）	奈良県庁、奈良県警察本部、奈良市役所、㈱南都銀行、上六印刷㈱、東洋スクリーン工業㈱	7 名

県内企業ＯＧとの交流会　告知チラシ

３）女子大学生ワーク＆ライフＥＸＰＯ 2018　　平成 30 年 10 月 27 日（土）

本学体育館にて「女子大学生ワーク＆ライフＥＸＰＯ2018」（奈良県主催、奈良女子大学・奈良県立大学共催）が開催された。このイベントは、女子大学生が就職活動のスタートラインに立つ前に、働く女性のリアルな話を聞くことで働き続けることを含めたライフプランをイメージする機会とすべく、一昨年本学学生が奈良県に企画提案し実現した。今年は昨年度に続き第２回目として本学学生 21 名がプロジェクト企画メンバーとして運営に携わり開催された。当日は、直前までの雨予想から一転、時折青空がのぞくまで回復した天気の下、県内企業等 25 社、本学および関西圏の他大学に通う女子大学生 63 名が参加、元サッカー女子日本代表（なでしこジャパン）東明有美氏による記念講演の他、ライフデザインセミナー、就活メイク講座、社会人スキル講座等、多彩なプログラムで行われた。受付では、運営に携わった本学学生メンバーが参加企業を事前取材し、女性活躍の取り組みや女子大学生へのメッセージなどをとりまとめた小冊子が配布された。また、丸テーブルを囲んでの気軽なコミュニケーションをコンセプトに行われた、出展各社の女性社員らによる仕事の中身や働き方などの話は、参加した学生も大いに刺激を受けたようで、奈良の企業等で働くことへの貴重な動機付けの機会となった。本学学生で構成されたプロジェクト企画メンバーは、リーダー、副リーダーのもと企画チーム、ＰＲチーム（ＳＮＳ、チラシ、記事、グッズ）で構成、ミーティングを重ねながら、当日の運営はもとより、学生が出展企業に事前訪問し、担当者に直接インタビューして感じた企業の魅力、先輩女性の働き方や本音などを記事にしてＳＮＳにて発信をしたり、小冊子にまとめる等、このプロジェクトのコアメンバーとして活躍した。

女子大学生ワーク＆ライフＥＸＰＯ2018　告知チラシ

女子大学生ワーク＆ライフＥＸＰＯ2018　開催当日の様子

４）女子大学生のためのキャリア形成講座　　平成 30 年 11 月 10 日（土）

奈良女子大学にて「女子大学生のためのキャリア形成講座」（奈良県主催、奈良女子大学共催）が開催された。

この講座は、就職活動を控えた女子大学生が、自分の価値観を知り、女性の多様な生き方を学ぶことにより、自身のライフプランの具体性を高め、主体的に生きる意識を培うもので、和歌山大学経済学部助教の本庄先生から「ライフデザイン基礎講座」、日本ＦＰ協会から「ファイナンシャル・プランニング講座」が実施された。当日の参加者は４名であったが、自分の価値観や自分の軸となるものを見つけるためにライフキャリアの必要性及び自分の将来の役割やライフイベントなどを考えるワークやゲストスピーカーとの交流、夢の実現に向けて資金計画を立てることは柔軟な生き方にもつながるということを学び、普段の大学の講義とは一味違った和気あいあいとした雰囲気で講座が行われた。

キャリア形成講座　告知チラシ

５）県内企業７社への会社見学会の実施　　平成 30 年 11 月～12 月

平成 30 年度に新たに企画・実施した就職支援事業である。

県内就職を視野に入れた３回生（平成 32 年３月卒業予定）をターゲットとして、個別県内企業見学会を実施した。奈良県奈良しごとｉセンターの協力のもと、一人でも多くの学生が奈良県内に就職することを目指し、就職活動を控えた学生が奈良県を代表する企業をＣＯＣ＋コーディネーターが帯同して少人数での直接訪問を実施した。

回	訪問日	訪問企業	参加者数
第１回	H30 年 11 月 7 日（水）	クオリカプス㈱	４名
第２回	H30 年 11 月 16 日（金）	DMG 森精機㈱	８名
第３回	H30 年 11 月 21 日（水）	三笠産業㈱	２名
第４回	H30 年 11 月 28 日（水）	㈱ＭＳＴコーポレーション	４名
第５回	H30 年 12 月 5 日（水）	㈱呉竹	４名
第６回	H30 年 12 月 12 日（水）	梅乃宿酒造㈱	５名
第７回	H30 年 12 月 19 日（水）	佐藤薬品工業㈱	３名

訪問企業と日程等

県内企業見学会　告知チラシ

◇第１回　11 月 7 日(水)　クオリカプス㈱

大和郡山市にあるクオリカプス㈱を訪問した。三菱ケミカルホールディングスのグループ会社である同社は、医薬品用のカプセルでは世界２位（国内１位)、医薬品の生産ラインで使用される製剤関連機械では業界トップクラスのシェアを持つメーカーである。取引先は国内ほぼ全ての製薬メーカーで、海外大手企業とも取引を行い、グローバルに事業展開される。総務人事部担当者とカプセル営業部担当者（本学 OG）から会社理念、会社のサービスの特徴など説明を受けた後、研究部門、カプセル生産部門、機械事業部の生産現場などを見学した。参加学生からは、「サイトではわからない企業の姿やカプセル業界のことを詳しく聞けて良かった」、「働く社員さんの姿を見ることができてよかった」、「ＯＧの方や人事の方との距離が近く、気軽に質問しやすい環境下で参加して良かった」との感想があり、少人数での会社見学会ならではの大変有益な機会となった。

◇第２回　11 月 16 日(金)　DMG 森精機㈱伊賀工場

三重県伊賀市にあるＤＭＧ森精機㈱を訪問した。同社は 1948 年奈良県大和郡山市発祥の工作機械のトップメーカーで本社は名古屋市だが、主な生産拠点は奈良事業所と奈良県に隣接した三重県伊賀事業所に置かれる。今回は、同社最大の総合生産拠点伊賀事業所の見学となった。工作機械の開発に携わった本社人事部の担当者から、会社の理念や沿革の他、開発、設計、製造技術及び、全世界 43 か国に及ぶグローバルネットワークを持つ同社の生産やサービス体制について説明を受けた。その後、最先端の工作機械生産ラインや開発センターを見学した。参加学生からは、「同社の技術の高さに驚いた」、「機械の事は全く知らず少し不安あったが、丁寧な説明や対応で安心して参加することが出来た」、「文系だとあまり工業系の会社を知ることが出来ないので大変貴重な機会となった」との感想があり、知らなかった業界での新たな発見や気付きを得たようであった。

◇第３回　11 月 21 日(水)　三笠産業㈱

奈良県広陵町にある三笠産業㈱を訪問した。大正元年に木樽用の呑口の製造からスタートした同社はプラスチックキャップ・ペットボトルなど各種包装資材の製造販売を行い、食品用液体調味料の分野で業界シェア 30%を誇る。人事総務部の担当者や入社２年目の社員から創意工夫を大切に「アイデアにフタはしない」、「液体を包む技術で世界の食卓を豊かにする」を信条としていること、会社の製品・技術力や毎日の仕事内容などの話を聞いた。参加学生からは、「全く知らなかったが、素敵な会社だった」、「案内頂いた方のようにＢtoＢの企業をうまく見つけられたら良いと思った」との感想で大変有意義な会社見学会となった。

◇第４回　11 月 28 日(水)　㈱ＭＳＴコーポレーション

奈良県生駒市にある㈱ＭＳＴコーポレーションを訪問した。同社は、金属加工に不可欠な「ツーリング」と呼ばれる「工作機械」に装着する「工具保持具」を日本初商品化した業界のパイオニアで 1937 年創業（81 年）の歴史ある会社。現在も業界トップクラスの性能と品質を保つオリジナリティ溢れる商品を開発・製造・販売するメーカーである。商品は、国内のみならず海外でも町工場から航空機産業まで超精密な技術力を要する様々な生産加工現場で使用され、あらゆる産業のモノ造りに貢献している。管理部経営企画室の担当者、本学ＯＧの社員から、ＭＳＴブランドの話や会社の特徴についての説明を受けた後、生産現場や工場を見学した。参加学生から「社員の人もとてもあたたかく、実際に見ないと分からない会社の雰囲気やツーリングの工程を知ることが出来た」、「とてもきれいなオフィス、工場で驚いた」、「営業や技術職だけでなく展示会のための仕事もあると初めて知ることばかりでした」との感想で、ＢtoＢ企業を見学できる貴重な機会となり、新たな発見や気付きを得たようであった。

◇第５回　12 月 5 日(水)　㈱呉竹

奈良市にある書道用品や筆ペンで馴染みの㈱呉竹を訪問した。同社は創業 1902 年で、伝統的な墨造りを守りつつ「墨滴」、「筆ペン」はじめ新しい商品や分野を開拓し続けてきた国内に留まらず、海外からの信頼も厚い文具メーカーである。本学、一般公募学生との合同訪問となった。総務経理チームの担当者から会社概要の説明後、製造現場の見学、先輩社員との対談会を行った。担当者からは、創業 116 年の老舗企業ながらもチャレンジ精神あふれる会社であり、人と人をつなぐコミュケーションツールを作っている会社であること、また先輩社員との対談会では、時間管理がしっかりしていること、社内の風通しがよく色々な提案を受け入れてもらえるといった話があった。参加学生から「書道の経験もあり、興味深く見学させていただいた」、「自分が思っていた以上に様々な商品展開をされていることに驚いた」、「墨や筆を扱うメーカーならではの手書きや人間味を大切にされるあたたかい会社だと思った」との感想があり、奈良県内の「ＢtoＣ企業」を知る大変貴重な見学会となった。

◇第６回　12 月 12 日(水)　梅乃宿酒造㈱

葛城市の梅乃宿酒造㈱を訪問した。同社は 125 年間、葛城山麓で日本酒を造り続けてきた酒蔵、「新しい酒文化を創造する蔵」をキャッチフレーズに大きく売り上げを伸ばす。また、昔ながらの製法を守る一方、世代や習慣、国境をも越えた新しい酒づくりへの挑戦を続ける。社員の平均年齢は 35 歳、若いうちから様々な経験や人脈作りができるよう、組織の活性化にも努めている。戦略推進部の担当者から、会社の沿革と酒造業界全体の説明を受けたあと、酒蔵で実際の生産工程を見学した。また、これから就職活動を迎える参加者に対して、本当の会社の姿を見極めるため、様々な視点からしっかりと観察するようアドバイスもいただいた。参加学生からは「会社の歴史や日本酒・リキュールの製造方法まで詳しく知れ大変良かった」、「酒蔵を見学でき、貴重な経験となった」、「日本が誇る日本酒が奈良から海外に進出していることが嬉しく思った」との感想があった。

◇第７回 12 月 19 日(水)　佐藤薬品工業㈱

橿原市の佐藤薬品工業㈱を訪問した。同社は、1947 年の創業以来、カプセル錠剤分野における医薬品受託加工業界のリーディングカンパニーとして、他メーカーからの製造受託のみならず、様々な自社医薬品も手がける会社。製薬に関わる幅広い業務を行い、品質保証部と品質管理部という２つの管理体制のもと、維持発展的に品質の向上を図る。全社員中７割近くが 30 代と若く、明るく活気のある職場で、出産後も働き続ける社員のために事業所内託児所「ＳＡＴＯにこにこ園」も運営するなど福利厚生面も充実している。当日の参加者３名、総務部の担当者から会社の沿革や事業の概略、社員の福利厚生に係る説明を受けた後、参加者全員が無塵作業衣服に着替え、厳重な管理の下、製造工程を見学した。参加学生からは、「生産過程を詳細に見学でき、製薬業界への興味関心が深まった」、「毎回このような厳重な作業服を着て製造していることが初めて分かり、異物混入が絶対に許されない医薬品製造の厳しさも実感した」、「すべてが機械化ではなく、最後は人間の目で確認作業を行う部分もあり、製薬現場の大変さが分かった」との感想があり、今まで知らなかった業界、企業への多くの新たな気づきが得られた。

６）県内自治体の魅力を知るセミナーの開催　　平成 30 年 11 月 29 日（木）

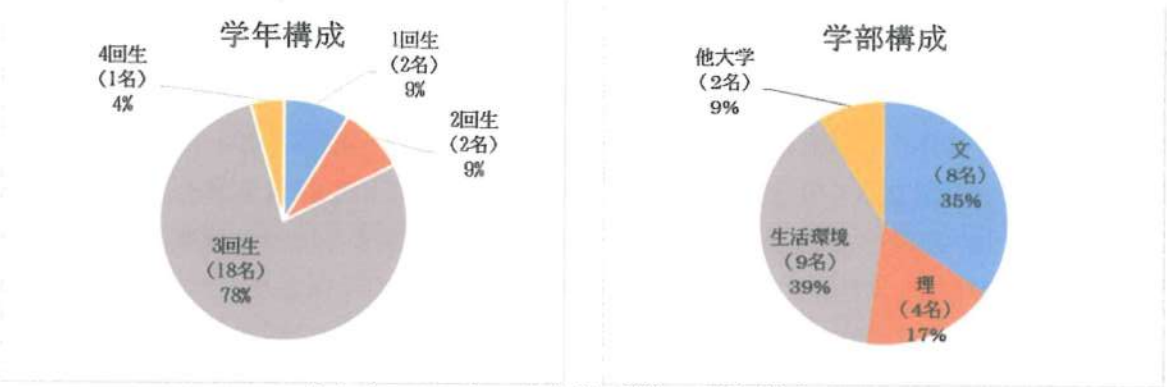
本学大学会館大集会室にて「県内自治体の魅力を聞くセミナー」を開催した。10 月 27 日（土）に開催された「女子大学生ワーク＆ライフＥＸＰＯ」の地方公務員編として企画したもので、昨年に引き続き２回目の実施となった。今回は県内 10 自治体の協力を得て、職員として活躍している本学ＯＧも 10 名が参加。また、学生は３回生を中心に１・２回生も含め 23 名（ＣＯＣ＋事業の参加校である奈良県立大学の学生２名を含む）が出席した。最初に自治体側から、職員の自己紹介ならびに各自治体の特色や魅力に関するプレゼンを行い、その後学生が個別の自治体ブースを訪問、説明担当の職員やＯＧに自治体のこと、仕事のこと、採用試験のことなどをじっくりと聞いた。各自治体で活躍している先輩も多く同席していることもあり、学生からは、「公務員の方に直接仕事内容をお聞きする機会は滅多にないのでとても貴重な体験でした」「どなたも気さくに様々な話を聞かせてくださり、大変良かったです」「公務員になるための勉強の話も聞けて為になった」「年齢の近いＯＧさんがいたことで大変聞きやすかった」といった感想が聞かれた。県外出身者が多く、参加学生たちにとっては、タイトルどおり県内自治体の魅力をじっくりと聞くことができ、情報収集だけではなく、就活に向けた学生生活を送るためのアドバイスを得るなど大変有意義なセミナーとなった。

参加団体（10 団体）	
奈良県警察本部	御所市
奈良市	生駒市
天理市	宇陀市
橿原市	斑鳩町
桜井市	下市町

県内自治体の魅力を聞くセミナー　チラシ

◇アンケート結果

県内自治体の魅力を聞くセミナーアンケート　集計結果
（回答者数：23名（参加者23名））



セミナーアンケート集計（学年、学部構成）

参加学生の感想・意見

・今までいろいろなセミナーに参加しましたが今日のセミナーが一番充実していました。とても勉強になりました。ありがとうございました。
・少人数でしかも奈良女のＯＧの方のお話を聞けてすごく良い機会で就職活動の参考になりました。またこういう場があれば参加したいです。
・自治体に関する説明だけでなく、ＯＧの方々のお話も聞くことができてうれしかったです。自治体に入ってから何がしたいのかを明確に考えていこうと思います。質問が思いつかなかった自治体があったので、自治体研究をしようと思います。
・ブース形式だったので質問がしやすく、今後の就職活動に生かすことができるものが得られた。あまり知らなかった自治体についても知れて良かった。
・奈良女まで沢山の自治体さんに来て頂いて、とてもぜいたくな時間を過ごせました。町役場いいなと思いました。
・公務員の方に直接仕事の事をお聞きする機会がなかったので今日聞くことが出来て良かった。奈良県内の自治体に就職したいと思っているので参考になりました。十津川村や川上村など南部の村にも興味があるので、村の自治体の話も聞いてみたかった。
・公務員になりたいとより強く思った。
・もっとたくさん時間があればよかった。
・自治体の職員様にお話を聞く機会というのはなかなかないので緊張してしまったが、どなたもとても気さくに様々なお話を聞かせてくださり、実に為になる時間を過ごさせていただきました。
・自治体で働いておられる方から直接お話を聞けることは滅多にないのでとても貴重な体験でした。
・なんとなく堅い仕事であるというイメージがあったけれど、実際にお話を聞いてみてイメージが変わりました。それぞれの業務内容等についてもお話が聞けて良かった。
・様々な自治体の方とお話できて良かった。試験の勉強について話を聞けてためになった。
・気軽にと思って参加したら思っていたよりガッツリした説明で少し尻込みした。
・様々な自治体さんのお話を聞くことが出来、就職の際のアドバイスや市役所に勤めていてよかったと思う点など、生の声を聞くことができ、とてもよかったです。
・橿原市の市役所とホテルを同じ建物でオープンする等、各自治体で今行っているおもしろい事業や特徴について色々知れて良かった。

２．３　成果の社会的還元（地域貢献）について

総　論

平成27年度のやまと共創郷育センターの発足とともに、ＣＯＣ＋事業活動の内容を広く知って頂くためにホームページを開設し、積極的な広報活動に努めている。

平成30年度は、4月21日付日本経済新聞関西経済欄に本学の取組が紹介されたほか、「ニュースレターの発行」など、学内・学外に向けてＣＯＣ＋事業を周知するとともに、地（知）の拠点となるべく、地域の自治体や中小企業と協働し、地域の雇用創出の役割を果たしてきた。

（1）ニュースレターの発行

平成30年度は、ＣＯＣ＋事業の周知のため、全教職員に向けて２回のニュースレターを発行した。2018年秋号及び2019年春号は以下のとおり。

地(知)の拠点

奈良女子大学　2018/9/20

やまと共創郷育センター NEWSLETTER

2018年秋号

COC＋評価委員会、COC＋事業協議会を開催

平成30年度開講「地域志向科目」について

～第6回 野迫川村奈良女塾を開塾～

今後の取組予定

★のウィンターフェスの開催

★女子大学キャリアフェスティバル　10/27(土)

★県内企業による業界研究会　11/11(水)

★県内就職者の意見聴取による企業訪問　11月～12月

★県内在学生の魅力を探るセミナー　12月

★本学・奈良県内の各高校の大学バス利用の意見交換会　2月

県内就職事業目標値達成に向けて

COC＋事業では、学生の県定就職のための取組みとして、インターンシップ参加者の10%アップを目標としています。また、就職支援のための事業の第1期から第3期の実績を見ると、平成29年度には、約2年間の間に、約200名の学部生が県内就職を希望するようになりました。本学の目標値である「県内就職者の10%アップ」の達成に向けて、引き続き、インターンシップ参加者の増加を図ります。

やまと共創郷育センターでは、今後も引き続き学生に奈良県への興味関心を高めてもらうため、様々な事業に取り組んで参りますので、ご理解とご協力の程よろしくお願い申し上げます。

奈良女子大学　やまと共創郷育センター

平成30年度前期のCOC＋事業の取組状況

～県内企業・業界研究会～

～県内企業OGとの交流会 inラウンジ～

サテライト施設情報

～奈良県下市町にて学習支援事業を実施～

2019年春号

地(知)の拠点

奈良女子大学　2019/3/6

やまと共創郷育センター NEWSLETTER

2019年春号

様々な分野で県内各地域、自治体、企業と連携・協働

平成30年度後期のCOC＋事業の取組み

●「女子大学生ワーク&ライフEXPO 2018」(10/27)

●「県内企業見学会」(11～12月 計7回実施)

●「県内自治体の魅力を探くセミナー」(11/29)

●「原と木 マルシェ」(12/1)

●「コミュニティ・アクション政策発表に関する公開講座」(12/2)

●「奈良県内大学生による学習支援事業成果報告会」(12/13)

地域志向科目「なら学＋（プラス）」を開講

平成30年度 なら学+(プラス)授業スケジュール

COC＋フォローアップに係る現地視察を受けました

地域志向科目の必修化を進めています

平成31年度にアントレプレナー科目を新規開講

県内就職事業目標達成に向けてご協力をお願いします

奈良女子大学　やまと共創教育センター

（２）㈱南都銀行の寄附目録贈呈式　　平成 30 年 7 月 24 日（火）

奈良女子大学にて㈱南都銀行からの寄附にかかる目録贈呈式が開催された。ＣＯＣ＋参加企業でもある㈱南都銀行は、平成 27 年 7 月から「ナントＣＳＲ私募債」の取扱いを開始しており、東洋スクリーン工業㈱（本社：奈良県斑鳩町）の「私募債」起債を記念するとともに、起債額の一部が奈良女子大学に寄附された。

東洋スクリーン工業㈱は 1954 年創業の「ウエッジワイヤースクリーン」のろ過装置製造メーカーで、2017 年度に本学学生が初めて入社し、現在も活躍している。ＣＯＣ＋事業に賛同いただいている同社の廣濱毅憲社長は、ＣＯＣ＋シンポジウムに出席された際、「学生様方の発表内容、姿勢のレベルの高さにも驚かされました。学生様方がこれだけ奈良の事を想い、動いてくれているのだから我々受け入れ側の企業はもっともっと努力を重ねなければいけないと認識させられた。先ずは当社自身が出来る事をしっかりと行い、色々な場で発信し、より多くの方に魅力ある企業と認知頂けるよう、そして、その活動が微力ながらＣＯＣ＋事業の方にも少しでもお役に立てるよう尽力して参りたい」とのコメントがあった。

さらに、同社は、経済産業省の「地域未来牽引企業」にも選定されており、2018 年度においても本学から新たに１名が採用され、地域と一体となって地元就職率の向上に取り組む本学のＣＯＣ＋事業への取り組みに対するよき理解者となっている。

（３）国広産業㈱との共同研究の取り組み

国広産業㈱（本社：奈良県葛城市）は約 50 年間バレル研磨用プラスチックメディア（研磨石）の製造を行っており、ＣＯＣ＋事業に対するよき理解者でもあり本学学生の新卒採用ならびに共同研究を現在実施中である。

バレル研磨には、メディア（研磨石）の他にコンパウンド（界面活性剤）も必要で、研磨性能を引き出すにはメディア（研磨石）の性能アップだけでなく、コンパウンド（界面活性剤）のアップデートも不可欠と考えている中、本学との共同研究をスタートした。2018 年 1 月～12 月の 1 年契約で共同研究「界面活性剤の開発」を推し進め、手探りの状態であったものの 1 年間の成果として仕上げ研磨に効果のある界面活性剤を試作開発することができた。

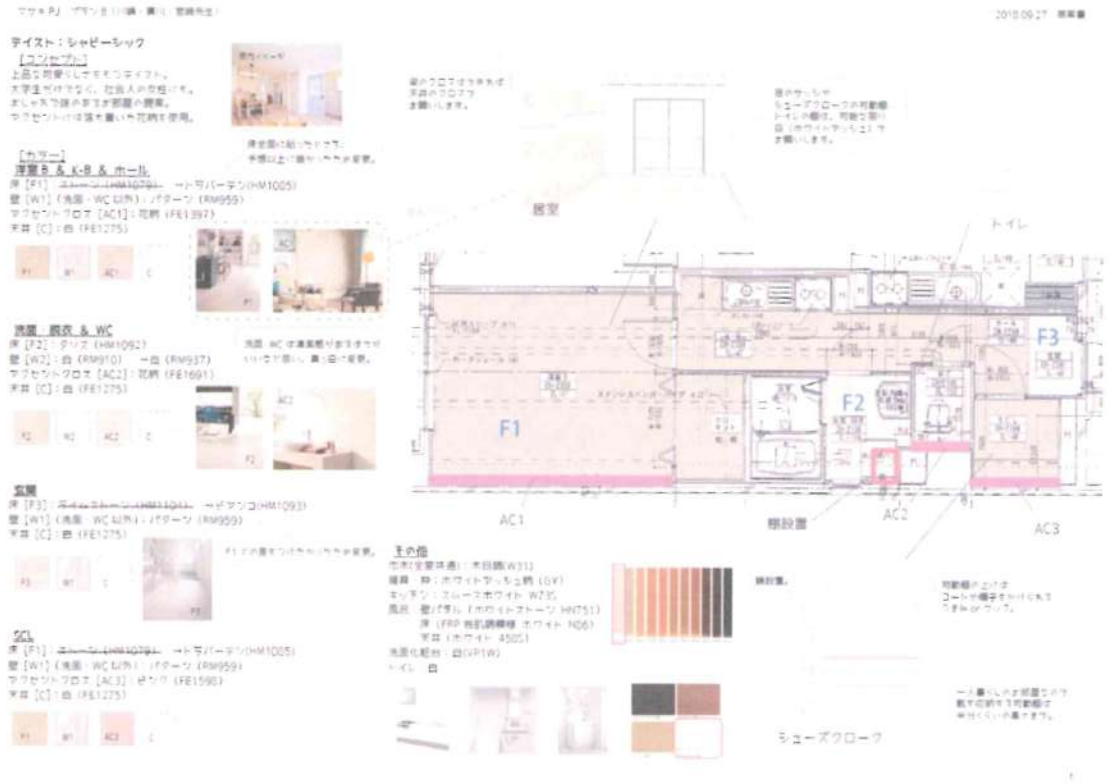
（影石社長からのメッセージ）

プラスチックメディアの用途は多岐に渡っており、今後も用途が広がる可能性を秘めています。現在主流の自動車・電子部品向けメディア（研磨石）から航空宇宙、医療分野、更にはその先のバイオ、アート分野へと従来の研磨の枠を超えた取組みも積極的に行っていき、研磨を追及していきたい。奈良女子大学との共同研究契約を継続し、界面活性剤の可能性とプラスチックメディアの可能性を更に広げ、魅力ある国広産業としていきたい。

（4）賃貸のマサキ（正木商事㈱）との共同プロジェクト

昨年度に引き続き、本学のならまちセミナーハウスのオーナーでもある正木商事㈱と生活環境学部住環境学科の学生が、地元企業と大学の協働による地域活性化を目指して新築賃貸マンション（１ＤＫ）の内装に取り組んだ。「元気が出る部屋に住みたいが、落ち着く部屋でもあって欲しい」、「大学生だけでなく、社会人の女性にも上品なかわいらしさを持つテイスト」、「便利な収納家具とその日らしい生活スタイルを楽しんでもらいたい」という３つのコンセプトで３部屋の内装に取り組んだ。

住環境学科の学生は、設計演習という授業で建築図面と模型を製作しているが、自分たちの提案が実現する機会は滅多にない中、今回のプロジェクトで、自身の生活体験を活かして提案ができたこと、クロスの選定、壁面収納、木の温かみを感じるデスクなど自分たちの提案が完成した空間を体験できたことは、学生にとって得難い貴重な学びの機会となった。当事者だからこその細やかな提案には正木商事さんにも喜んでいただき、地元企業にも学生にも嬉しい協働ができた。



賃貸のマサキとの共同プロジェクト

[A 班]

・M1　多々良里奈

私にとって今回のプロジェクトは、昨年に引き続き２回目となりましたが、真っさらな空間に天井、床、壁と色をのせていきながら、自分たちがイメージした空間に近づくように、それぞれを組み合わせていくのが難しかったです。チーム内で話し合う際も、好みや提案が１人ずつ異なり、たくさんあるアイデアの中から、最終的に納得のいくものに仕上げる上で、何度も試行錯誤しました。これから入居される方の毎日が、少しでも明るく色づいてくれたらと思います。

・B4　大谷咲月

新築ということで、モノがない状態で壁紙などを決めていくのは難しかったですが、内装を一から決めていくめったにない貴重な経験が出来ました。今までは、自分の部屋などで「この壁はこの色にしたらオシャレかな」など頭の中で想像することはありましたが、それをチームで話し合って現実のものにしていくのはとても楽しかったです。３つ異なるタイプの部屋ができたので、それぞれどんな人が入ってくれるか楽しみです。

・B4　森口和紗

今回は部屋に住んで欲しいターゲット層をイメージしながら内装の色を決めさせていただきました。このことは自分の好みだけで選ぶこととは異なるため、普段は選ばない色との組み合わせを考える必要もあり難しさがありました。しかし同時に、縛られずに多くの色に目を向けて暮らしを想像し選ぶことはやりがいと楽しさがありました。学生の間に実際に作られる建物でこのような機会をいただけたことはとても貴重な経験となりました。

[B 班]

・M1　川嶋汐里

今回のプロジェクトで最も難しかったのはクロス選びでした。壁や天井、床の組み合わせはもちろん、サンプルで見るクロスの色と実際の色はかなり違うため、パースを描いて部屋全体のイメージを深め、何度も打ち合わせを重ねて慎重に選びました。最終的に提案した女子大生や社会人女性向けの「上品でかわいいシャビーシックなお部屋」がオーナー様に気に入っていただけたと聞けて非常に嬉しく、自分で考えたアイデアを人に提案することの楽しさを感じました。

・B4　廣川陽奈

私は下宿しているので、その生活の中で感じる要望や不便さを自分の意見として発信できたことが良かったなと思います。誰もが使いやすいものにしたい、でも可愛さも取り入れたいという２つの気持ちがあったので、そのバランスが難しかったです。このアパートがたくさんの人に愛され、楽しく快適に過ごせる場所になってくれたらな、と思います。

[C 班]

・M2　中飯久美子

今回の新築内装プロジェクトでは、これからできる部屋の内装を自由にデザインさせていただけました。まだ実際にできていない部屋を想像しながらコンセプトや色調を決めていく作業は、色合いの検討や日光の入り方、部屋の広さの確認など、画面上でしか行えなかったため苦戦しました。内装という、建物を建てる過程の一部分でも、決めていかなければならないことが非常にたくさんあるということを実感し、１つの建物をつくる大変さを改めて学ぶことができたと思います。また、経験不足な大学生という立場でありながら、実際に 建つマンションの内装をデザインさせていただけるという普通なら得られない機会を与えてもらい、責任ある仕事を請け負う経験を得ることができました。

・M1　宮本順加

今回は大変貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。学年が異なったことと違った考え方を持つ 3 人が１つのチームになったために意見を合わせることが難しかったが、１つの案をいろいろな視点から見ることが出来たことが良かったなと思います。今後、マンションが完成し、私たちが考えた住戸にどんな住民の方が入り、どう感じられるかが大変ワクワクします。

・B4　西あすか

今回担当したのが男性女性、学生社会人と様々な入居者を対象としたお部屋だったのでどんな人も喜ぶ工夫を考えるのが楽しくもあり難しかったです。こんなものあったらいいなと考え、良かれと思って付けたものが使わない人にとっては邪魔になってしまうということにはじめは気付かず、みんなが使えるもしくは使わなくても邪魔にならない工夫を考えるのが難しかったです。完成がとても楽しみです。

（５）野迫川村奈良女塾　　平成 30 年 8 月 27 日（月）～8 月 31 日（金）

奈良女子大学野迫川村交流センターにて第６回野迫川村奈良女塾を開催した。奈良女子大学では春休み、夏休みの機会を捉えて、日頃、高校生や大学生に接する機会のない野迫川村の小中学生に向けて学習サポートや大学生とのふれあいを通じて将来の進路を考えるきっかけとなるよう野迫川村奈良女塾を開講している。今回の参加対象者は小学生５名、中学生３名の８名。午前中は国語、算数、英語、社会など夏休みの課題学習の補助、午後は、理科の実験、おやつづくり、かるた大会、英語による映画鑑賞などの活動を実施した。また、授業の合間には、大学生が子供たちに自らの経験を語ることにより、将来の高校生活・大学生活、自分の未来を考えるきっかけづくりも行った。

（６）下市町での学習支援　　平成 30 年 8 月 20 日（月）～22 日（水）

奈良女子大学下市アクティビティセンターにて本学学生による学習支援事業が開催された。本学学生が参加して下市町の小中学生（20 日６人、21 日７人、22 日４人）への学習支援を通じた交流を深めることができた。

昨年 9 月は下市小学校ならびに下市中学校に出向き、授業補助という形での実施だったが、今回は夏休み期間中の実施となったことから、下市アクティビティセンターにて夏季ワーク等の宿題を中心とした学習のお手伝いの他、「下市町手作り地図」の作成や「奈良“まほろば”かるた」大会の実施など地域・地元に密着した社会学習の実施となった。

参加学生からは、「小学生と一緒に夏季学習のお手伝いができて楽しかった」、「参考になればと自身の高校・大学生活を紹介した」、「初めて下市町を訪問した。都会では得られない下市町の良さを知ることができた」といった感想があった。

今後の展開と奈良県教育委員会からの評価

◇本学習支援は、野迫川村奈良女塾をベースとして始まった奈良県が主催する奈良県南部東部学習支援活動の一つで、平成30年度は8団体（吉野町、大淀町、下市町、山添村、宇陀市、曽爾村、御杖村、五條市）に拡大して、参加大学も奈良女子大学の他、畿央大学、奈良教育大学、天理大学、奈良学園大学、帝塚山大学の6校の学生が参加する事業に発展した。

◇奈良県教育委員会事務局 大学生塾コーディネーター松岡指導主事からは、

日頃、大学生に触れる機会がなく過疎地の小中学生の満足度は非常に高く、参加大学生においても、「奈良県の南部東部で学習支援をするのが初めてである」「大学で学習していることや部活動、専門的なスキルを生かすことができる」「子どもたちや地域から学べたことがある」「機会があればまた参加しようと思う」といった意見の他、

・県南部東部（過疎地）へ初めて足を運んだ学生も多い、
・この学習支援事業に参加し背中を押され地域に入り、地域を知る機会提供となっている、
・夏休みの学習支援終了後も定期的に山添中学に教員補助のボランティア活動を続けている学生がいる、
・地域おこし協力隊に関心を持つ学生がいる、

との意見や感想が述べられ、その活動においては高い評価を受けている。

（７）奈良経済同友会との交流・懇談会　　平成 31 年 1 月 21 日（月）

奈良女子大学では、地元企業との連携をさらに強化するため、平成 18 年度から奈良経済同友会との交流・懇親会を開催しており、平成 30 年度については、以下のとおり実施した。

日　時：平成 31 年 1 月 21 日（月）15：00～18：50
場　所：奈良女子大学理学部 Ｇ棟２階 Ｇ２０１教室
参加者数：85 名（同友会　57 名、本学　28 名）

＜日　程＞

15：00　開会　開会挨拶 奈良経済同友会 代表幹事　北 義彦 氏
　　奈良女子大学長　今岡 春樹

15：10　奈良女子大学 講演　国際交流を通した社会連携の試み

（1）「インドネシア研修報告」

・インドネシアにおける森林保護の取り組み　文学部４回生　久保田 奈津
・インドネシアの環境汚染　博士前期課程１回生　白井 玖美
・ガジャマダ大学との学生交流の一コマ　博士前期課程１回生　前川 ほのか
・インドネシアを訪問して気づいたこと　博士前期課程１回生　リュウ カセイ

（2）「奈良女子大学とバングラデシュ・ダッカ大学との学術交流活動について
－ これまでの活動とこれから －」
奈良女子大学 研究院自然科学系 教授　高須 夫悟

（3）「理系女性教育開発共同機構の『グローバル化推進プロジェクト』について」
奈良女子大学 研究院自然科学系 教授　山下 靖

（4）奈良経済同友会　講演
「新興国の農業インフラの現状と取り組み紹介（ミャンマー、ベナン共和国の場合）」
株式会社大和農園ホールディングス 代表取締役社長　吉田 裕 氏

17：30　閉会

２．４　今後の取り組みについて（平成 31 年度の活動予定）

地域志向科目の履修により、多くの学生が地域に魅力を感じ地域定着に対する意識も変化しつつあり、こうした地域を志向する意識変化を実際に地域定着にどう結実させていくかが今後の課題となっている。

平成 31 年度は、ＣＯＣ＋事業の最終年度にあたることから、数値目標達成に向けて、教育プログラムならびに就職支援活動のさらなる改善・改革を図りながら、学生の地域創生への意識を高める。同時に県内企業の営業所や工場見学など、出会い・交流の機会を定期的かつ積極的に設けることによって、地元への就職意識を高めるとともに、ＣＯＣ＋コーディネーター帯同による企業訪問を行い、地元定着・就職内定へと導くよう取り組んでいく。

同時に、ＣＯＣ＋事業終了後の在り方について、ＣＯＣ＋推進機構に設置された、教育改革部門、就職支援改革部門、生涯学習・共同研究部門、事業評価部門との連携を取りながら 32 年度以降の取組事業についての精査、検討を進めていく。

（１）教育支援活動

「地域社会の抱える課題を見つけ働き方を考える」といった、より実践的な人材育成を目的とした「なら学＋（プラス）」ならびに「『奈良』女子大学入門」を開講する他、キャリア教育科目のひとつとして学生の起業マインド醸成のためのアントレプレナー授業「ビジネスプランの作り方～アイデアだけでは終わらせない！～」を開講する。

なお、授業の実施に当たっては、奈良県のほか県内企業から経営トップや実務家教員を招聘し、学生と企業の相互理解を深め、地域が必要としている人材養成教育、女性キャリア教育を実施する。

同時に、地域志向科目の質的向上を目指すため、授業評価アンケート等に基づいた授業内容の見直しを実施する。

（２）就職支援活動

１）県内インターンシップの拡充

インターンシップは学生にとって、働く姿を見ることで、社会人としての基礎力を養い、地元企業への就職の橋渡しにもなることから、学生・県内企業双方にメリットのあるインターンシップのあり方を探りながら、ＣＯＣ＋事業参加自治体、参加企業との協力のもと県内企業向けインターンシップの拡充を行う。

２）県内企業業界研究会、ＯＧとの交流会の充実

学内にて県内企業、県内自治体に限定した業界研究会（セミナー）ならびに県内企業に就職しているＯＧとの交流会を積極的に開催し、学生の地元定着支援を進める。

３）県内企業（自治体）見学会の実施ならびに３・４回生向けの会社見学会の充実

昨年度に引き続き、県内企業の魅力や知識を学生に知ってもらうため奈良県ならびに参加企業の協力の下、バス等による県内企業見学会を実施する。学生に地域産業・地域経済に対する理解、地元企業の魅力を深めさせるとともに、学生と県内企業との

距離を縮めることを目的としている。また、奈良県内企業への就職を視野に入れている学生に対してコーディネーターとの帯同訪問によるマッチングを推し進める。

4）本学卒業生への県内再就職支援

奈良県雇用政策課との連携により、既卒者の採用ニーズが高い県内企業へのＩターン、ＵターンＯＧへの再就職支援に取り組んでいく。

（3）ＣＯＣ＋事業の社会への還元

本学が実施しているＣＯＣ＋事業をニュースレター発行、ホームページにて広く社会に発信することにより、県内企業、県内自治体とのネットワークの充実を図るとともに、学生との意見交換等により受け入れ側の意識改革をも進める。

また、産学連携プロジェクトの推進、共同研究など奈良県経済団体との連携を深め、個別ニーズに応じたマッチングを強化し、新たな社会的価値の創造に努める。

（4）平成 32 年度以降の取組事業維持に向けた事業内容の精査・検討

地域が求める人材養成のための地域志向科目を継続する。とりわけ、ＣＯＣ＋事業にて開始した実務家教員を招聘した授業については、地域への理解、地方創生意識の涵養に欠かせないことから継続が決定されている。奈良県南部に設置したサテライト施設については引き続きＰＢＬ授業での活用を予定している。教育カリキュラム以外のＣＯＣ＋事業については、参加自治体・参加企業ならびに社会連携センター、大和・紀伊半島学研究所といった学内組織、ＣＯＣ＋推進機構運営会議等にて継続事業の検討を進める。